

子ども部屋は語られなくなったのか

—子ども部屋の歴史と現代の比較から見る現代の子ども部屋観—

15SG1195 堀田美沙紀

目次

序章	1
第1章 西洋での子ども部屋の誕生	2
1-1 「子ども」の発見	2
1-2 子ども部屋の誕生	4
1-3 1章のまとめ	6
第2章 日本での子ども部屋の普及の歴史	7
2-1 明治期の子ども部屋	7
2-1-1 明治期の家族観・子ども観	7
2-1-2 明治期の間取り	9
2-1-3 明治期の子ども部屋観	10
2-1-4 明治期のまとめ	11
2-2 大正期の子ども部屋	12
2-2-1 大正期の家族観・子ども観	12
2-2-2 大正期の家・間取り	14
2-2-3 大正期の子ども部屋	16
2-2-4 大正期のまとめ	17
2-3 第二次世界大戦後の子ども部屋	18
2-3-1 第二次世界大戦後の家族観・子ども観	18
2-3-2 第二次世界大戦後の間取り	19
2-3-3 第二次世界大戦後の子ども部屋	22
2-3-4 第二次世界大戦後の子ども部屋のまとめ	23
2-4 第2章のまとめ	24
第3章 1980年代の子ども部屋 子ども部屋批判論が台頭してきた背景	25
3-1 1980年代の子ども部屋所有率	26

3-2	子ども部屋批判論とは	27
3-3	1980年代の子どもに関する社会問題	29
3-3-1	不登校・引きこもり	29
3-3-2	少年犯罪	31
3-3-3	1980年代の子どもにまつわる社会背景のまとめ	33
3-4	「子ども部屋批判・批判」	35
3-5	3章のまとめ	40
第4章	現代の子ども部屋	41
4-1	現代の家族観・子ども観	42
4-1-1	ゆとり教育	42
4-1-2	情報社会化	43
4-1-3	現代の子ども観・家族観のまとめ	44
4-2	住宅メーカーの考える子ども部屋	44
4-2-1	住宅メーカーの考える子ども観・教育観	45
4-2-2	子どもの成長段階によって変化する子ども部屋	46
4-2-3	子どもの自主性を育てる部屋	48
4-2-4	家全体に広がる子どものための空間	49
4-2-5	住宅メーカーの子ども部屋観のまとめ	52
4-3	現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査	53
4-3-1	調査の概要	53
4-3-2	調査結果	54
4-3-3	アンケート調査まとめ	63
4-4	4章のまとめ	64
終章		65
謝辞		68
参考文献		69

付録

現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査	調査票	71
現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査	調査結果	74

序章

フィリップ・アリエスは、子どもが普遍に存在するものではなく、発見されたものだと述べた。子ども部屋もまた、子どもが発見されてから「発見」されたものである。それまで子ども専用の部屋がなかった時代から、子ども部屋が生まれ、子どもには子ども部屋が必要だと言われるようになり、普及していった。

しかし、子ども部屋が普及していく中で、子ども部屋が子どもの引きこもりや犯罪を引き起こすのではないかという意見が生まれ、子ども部屋を批判する時代が到来する。また、のちにそれらの子ども部屋批判論に対して、子ども部屋自体が子どもに悪影響を及ぼすのではないと異議を唱える意見も展開される。

このように子ども部屋をめぐる言説は、子ども部屋はあった方が良く、無い方が良くという両極端な議論で盛り上がっていたが、現代はどうであろうか。それまでの白熱した議論が交わされていた時代と比べると、現代では、子ども部屋が語られることは少ないように感じる。それは、子ども部屋の普及が進み、行き渡った結果、子ども部屋が「当たり前」になってしまったからであると考えられるかもしれない。

しかし私は、子ども部屋論が二極化された枠組みで語られなくなった理由は、現代では子ども部屋論が新しい時代に突入したからではないかと考える。子ども部屋に期待することや、子ども部屋の使い方、親の子どもへの意識などが変化し、子ども部屋推進・反対という議論ではない子ども部屋論に変化しているのではないか。

この問いに結論を出すために、本稿では、子ども部屋の歴史と現代の子ども部屋を比較する。まず、1章から3章で子ども部屋の歴史を分析し、時代ごとの構図を見つける。4章で現代の子ども部屋の構図を分析し、最終的には1～3章との違いを見つけるで、現代に特有な子ども部屋観を考察する。

第1章では、西洋の子ども部屋の誕生の歴史を考察する。西洋で生まれた子ども部屋がどのような意図・目的から誕生したのかを考える。子ども部屋とはどのようなものなのかを考える章であり、子ども部屋を考えていく際の枠組みを見つける章でもある。子ども部屋の誕生に影響を与えたと考えるアリエスの子どもの「発見」や、近代家族観・子ども観を参照し、西洋の子ども部屋の特徴を押さえる。

第2章では、日本で推進され普及してきた時代の歴史を分析する。日本の明治時代から1970年代までがその時代に当たる。西洋で生まれた子ども部屋が、日本でどのようにして広まったのかを考える。家族観・子ども観、家の間取りが、子ども部屋の普及に影響してい

ると考え、家族・子ども観の歴史の文献と、間取りの歴史の文献を参照し、時代ごとの子ども部屋の構図を読み解く。

第3章では、1980年代の子ども部屋が批判された時代を分析する。子ども部屋批判論にまつわる文献を整理し、それ以前の時代と正反対の主張がなされた背景を探る。子どもに関する社会問題や当時の子ども観に、子ども部屋批判の原因があると考え、統計などを参照する。また、「子ども部屋批判」と、「子ども部屋批判」を批判する、「子ども部屋批判・批判」の対立の意識の違いを、「子ども部屋批判・批判」の文献を参照し、それら2つの意見の構図を考える。

第4章では、1章、2章、3章の構図を現代の子ども部屋と照らし合わせることで、現代で子ども部屋はどう捉えられているか、それまでの子ども部屋論の構図とどのように異なっているかを考察する。4章では、現代の子ども部屋像に影響すると考えた、子ども観、住宅メーカーの子ども部屋観、子どもの部屋の所有率・意識調査という3つの観点から子ども部屋を考察する。それらの分析を踏まえ、現代の子ども部屋への意識を考える。

第1章 西洋での子ども部屋の誕生

1章では西洋の子ども部屋の誕生の歴史を考える。現代まで続く子ども部屋の起源を知ること、子ども部屋を分析する際の枠組みを見つける。枠組みとは、子ども部屋に普遍なこと、時代とともに変わってゆくことであり、以降の章で子ども部屋を分析する際に生かす。特にこの章では、子ども部屋はどのような過程の中で生まれたのか、どのような目的があつて作られたのかを考える。また、西洋で生まれたものであるという点に注目し、西洋独自の子ども部屋の特徴を押さえる。その際、子ども部屋の誕生に影響を与えたと考えられる近代家族観や、フィリップ・アリエスの述べた子どもの「発見」をふまえる。

1-1 「子ども」の発見

子ども部屋は、その名称の通り、子ども専用のものである。その子ども部屋は、子どもの「発見」があつて生まれたものである。つまり、大人が子どもを「子ども」として考えるよ

うになってから生まれたものであり、子ども部屋は比較的新しいものであるといえる。

ここではまず、大人によって子どもが子どもとして扱われるようになった歴史を述べる。フィリップ・アリエスの、『〈子供〉の誕生：アンシエン・レジーム期の子供と家族生活』を参考にし、子どもが発見されるようになった歴史を追う。

アリエスは、中世には子ども期の概念がなかった(アリエス 1980:122)と述べた。それは、子どもたちが無視されたり、軽蔑されていたからではなく、中世では、子どもが母親や乳母、子守役の心遣いがなくても暮らしていけるようになるとすぐに大人の社会に属して、大人と区別されなくなっていくからである(同書 :122)としている。またアリエスは、子供期は、子供に固有な性格、本質的に子供を大人や少年から区別する特殊性が意識されて生まれるものであり、その意識は中世にはなかった(同書 :122)と述べており、子どもをあえて子どもとして意識する必要性が中世にはなかったことが分かる。

子どもが子どもとして認識されていなかった理由は、もう一つある。「子供はその生存の可能性が不確実な、この死亡率の高い時期を通過するとすぐに、大人と一緒にされていた」(同書 :123)という事である。当時の子どもの死亡率の水準の高さもまた、子ども期の概念の不在につながっていた。

以上より、中世では現在と異なり、子どもの死亡率が高く、子どもを大人と区別する感覚がないという背景から、現代では子どもと見なされる年齢であっても大人と同様に見なされていたことが分かる。現在では子どもと大人を区別することが当然だと思われるように、この時代には元より子どもを大人と区別する概念がなかったと考えられる。

アリエスは、中世に子どもの概念のなかったことを絵画に注目し、子どもの描かれ方を分析することによって考察した。絵画の描かれ方の歴史を追うことで、どの時代から子どもの描かれ方に変化があるか分かることに注目していた。

アリエスによると、11世紀から13世紀は、子どもは、大人の背丈よりやや小さな背丈で表現され、子供期の特徴がない(同書 :35)という。この特徴から、子どもが子どもとして意識されていないことが分かる。

この概念に転機が訪れたのは、13世紀に入ってからである。アリエスは、13世紀から近代的な感覚にやや近いいくつかの子供が出現する(同書 :36)と述べている。一つの絵画を例に挙げ、

ランスの大聖堂に彫られた天使は子供というよりはすでに年長の少年といえよう

が、それでも芸術研究者たちは、丸みを帯び、優美で、極端に言えば若干女性化されているともいえる若人の特徴に注目するだろう。私たちはオットー大帝時代の細密画にみられた背丈の低い大人たちとは遠くにへだたったところに来ている(同書 :36)

と述べている。子どもらしい丸みや優美さが描かれ、子どもを描こうとする姿勢がうかがえる。身長だけが大人との唯一の相違点であった 13 世紀までと異なり、子どもを表す特徴が複数描かれている。

こうして、大人と区別されていなかった子どもは、13 世紀に「子ども期」が発見されたことにより、大人とは別の存在であることが意識され、「子ども」として扱われ始める。この子どもを「発見」なくして、子どもの専用の物、つまり子ども用品は存在しない。したがって子ども部屋は、子どもの「発見」の産物なのである。子どもの「発見」が、家族のなかの価値観を変え、それが近代家族観として世間に広がり、家の形や間取りを変え、子ども部屋の誕生につながる。この過程は次の 1-2 で述べる。

1-2 子ども部屋の誕生

子ども部屋は、1-1 で述べたように、子どもを「発見」し、子どもを意識するようになって生まれた。ここでは、なぜ子ども専用の部屋が必要とされたのかという目的と、子ども部屋の誕生には何が影響したのかを読み解く。この歴史を追うことで、以降の章で子ども部屋を考察するときに必要な枠組みを見つける。

子ども部屋というものは個室であるが、西洋では、元々個室という概念がなかった。神野由紀は、『子どもをめぐるデザインと近代：拡大する商品世界』において、家は私的な空間ではなく、家族以外の様々な人々が住み、出入りするような公的な空間という側面が強かった(神野 2011 :138) と述べた。家は、家族とそうでない人々が混在する場であり、公共の場という意識が強かった。

そのような状況が一変するのが 18 世紀以降である。神野によると、家族が愛情によって結ばれるようになると、家族は公的な社会から距離を置き、私的な個人空間に住むようになることで、プライバシーが芽生え、各部屋は廊下によって分けられ、独立性が生まれた(同書 :138) という。この頃になると、家族を結び付けるものが愛情になり、家族とそうでな

い人々の間に境界が生まれ、家の中も仕切られるようになった。この家族観の変化による、個室化という建築的な点の変化が子ども部屋の誕生するきっかけであると言える。18世紀以降の家族の形が、現在の家や家族像に近づいていく。

家族のプライベート化、個室化が進む中、子ども部屋が作られるようになったのは、「子ども」という存在が認識されるようになったからである。ここにきてアリエスの子ども観の発見が影響を与え始める。「子ども観の問題は常に家族の問題につながるものであり、子ども部屋も、まさしく近代的家族観が芽生える過程で現れた私的空間であった」（同書 :137）という神野の記述から、近代家族の中で子どもの存在が大きなものとなった結果生まれたものが子ども部屋であると言える。

以上のことから分かるように、子ども部屋は、家の中に最初から組み込まれていたものではない。家族が近代化し、個人空間の必要性が高まったこと、子どもの存在が認識されるようになったことから生まれたものである。

子ども部屋が発見されてから世間に広まっていく過程には、家族観の変化だけが原因ではなかった。神野によると、「子ども期の発見に伴い、子ども部屋や子供用家具類など、子どものための専用スペース、子ども独自の世界をつくり出す空間の必要性が唱えられるようになる」（同書 :137）、「消費を促す対象としての子どもが発見されてから、子どものあらゆる生活環境は新たな商品開発の可能性に満ちていった」（同書 :137）という。「子ども」という新しいジャンルを利用した売り手側の戦略もまた一つの理由であり、売り手側が消費者である世間に子ども部屋の必要性の意識を植え付けた。

売り手側の戦略による子ども部屋を始めに受け入れていったのは、中流上流階級の人々であった。神野は、「子どもにとって最適な特別に設えられた環境が子どもの発育に重大な影響を及ぼすという信仰が、大人と明らかに区別された子どものデザインを生み、近代的家族観、子ども観を持つ中流上層階級に受け容れられていった」（同書 :142）と述べている。家の中の環境が子どもに及ぼす影響を中流上流階級の人々が重要視していたことが分かる。子ども部屋を与えるにはある程度経済的に余裕が必要となる。子ども部屋を持つことを実現しやすい中流上層階級の人々が、子ども部屋に対して高い関心を寄せていたのだと考えられる。

西洋で生まれた子ども部屋であるが、子ども部屋が生まれた背景には、それまでとは異なる家族観、子ども観が影響している。元々公的な空間であった家族が、公的な空間と切り離れた私的な存在であるという家族観から個室が生まれた。また、その個室化の流れから、家

族は愛情で結び付けられ、子どもを大切にするという家族観・子ども観により、子ども部屋が誕生する。家族観・子ども観の変化が家の形に及ぼす影響力の強さが読み取れる。また、売り手側の販売戦略が、子ども部屋の普及に一役買っていたことが分かった。子ども部屋は誕生したからといってひとりでに普及するのではなく、宣伝的な力の後押しによって世間に広まっていくことが分かる。

1-3 1章のまとめ

子ども部屋は家の中に当たり前に存在するものではなかった。西洋で誕生した子ども部屋は、家族観の変化と、それに伴う家や間取りの変化による産物であると言える。元々公的空間であった家が、私的生活を営む場に変化し個室化を促した。その個室化に、子どもを「子ども」として大人と分けて考えるという子ども観の誕生が結びついて子ども部屋が作られるようになった。この構図を図式化したものが図 1-1 である。

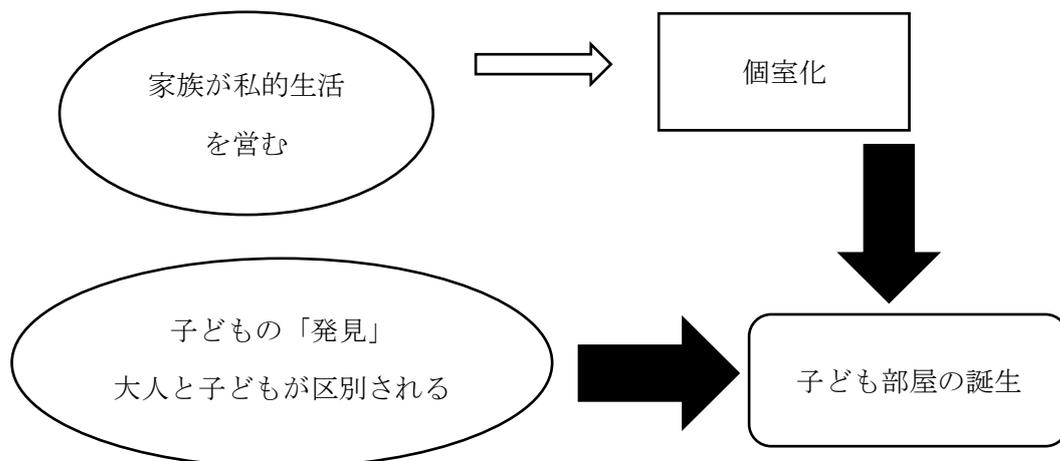


図 1-1

図 1-1 を見ると、子ども部屋は、家族観・子ども観、家や間取りと密接な関係があると言える。したがって、子ども部屋を考察する枠組みは、家族観・子ども観と、家や間取りが子ども部屋論にどのように影響するかという事になる。以降では、子ども部屋を考えたとき、家族観・子ども観と家や間取りとともに考えることで時代ごとの子ども部屋の構図を捉える。

第2章 日本での子ども部屋の普及の歴史

日本の子ども部屋の歴史を時代ごとに述べ、その際近代家族観・子ども観、家の形・間取りとともに分析する。1-3で述べたように、子ども部屋は家族観・子ども観と、家の形・間取り観が影響し生まれたものであるため、子ども部屋が日本で普及していく過程でも西洋と同様にそれらの思想が関わってゆくと考えたからである。時代ごとに①近代家族観・子ども観、②家の形・間取り観、③子ども部屋観の順に述べ、それぞれ専門の文献を扱い、最後にどのような影響があるかを考察し、構図化する。それを4章で現代の子ども部屋と照らし合わせ、現代の子ども部屋はどう語られるか考える。

2-1 明治期の子ども部屋

日本において子ども部屋という言葉が注目され始めるのは、明治期からである。したがって、本稿では明治期からの、家族観・子ども観、家の形・間取り観、子ども部屋観を考えてゆく。

2-1-1 明治期の家族観・子ども観

日本に子ども部屋が普及し始めた明治期は、日本において子ども部屋が受け入れられる土台ができた時代であった。その土台とは家族観の変化である。

小山静子が『子どもたちの近代：学校教育と家庭教育』で、「明治二〇年代は、新語として登場した家庭という言葉が社会に流布し、普及した時代であった」（小山 2002:152）と述べているように、新しい概念である「家庭」の存在が意識されるようになった。その家庭像の特徴について小山は、

一つには、家庭にあって子どもは家内労働力としてではなく、愛護され、教育されるべき存在としてとらえられていること、二つには、『男は仕事、女は家事・育児』という近代的な性別役割分業が想定されていること、三つには、一家団欒という言葉に象徴されるように、家族成員間での深い情緒的なつながりが重視されていることである(同書 :152-153)

としている。子どもと大人を区別し、子どもを労働力として扱わない子ども重視の考え、性別役割分業、家族間の精神的つながりが「家庭」の特徴として世間に示された。

西川祐子は、『近代国家と家族モデル』において、明治時代における「家」と「家庭」の違いについて示している。西川は、「家」と、「家」に対抗してつくられた「家庭」はいずれも近代の新造語であり、家族は、明治民法における「家」制度の戸主がひきいる「家」家族と、次男・三男がおもに都市部において形成する「家庭」家族の二重構造をとっていた（西川 2000:16-17）と述べた。また、「家」と「家庭」の世帯は、人の往来と物品、金銭の仕送りにつながり、両家族の境界は曖昧であり、経済基盤の脆弱な「家庭」家族は不況・災害のたびに「家」家族の庇護をもとめた（同書 :17）という。「家」の構成集団の一員である人物が新たに作るものが「家庭」で、「家」と「家庭」は切っても切れない関係であったと言える。

「新たに作る」ものである家庭は、一代限りのものであるという特徴がある。西川は、

「家庭」という言葉は、「家」同様に観念的な空間を指している。家族を個人個人の集団としてとらえるよりは、愛情、情緒によってくくられ一つの空間にいれられた団体としてあつかう。ただし「家を継ぐ」とは言うが、「家庭を継ぐ」と言えないことから明らかなように、「家庭」は夫婦一代かぎりの空間（同書 : 43）

であると示した。個人の集まりというより、精神的つながりによる部分の大きい「家庭」では、後世に引き継ぐという感覚が薄い点も重要である。各「家庭」のなかにオリジナルな情緒的なつながりがあり、それは後世に引き継げるものではないからではないだろうか。

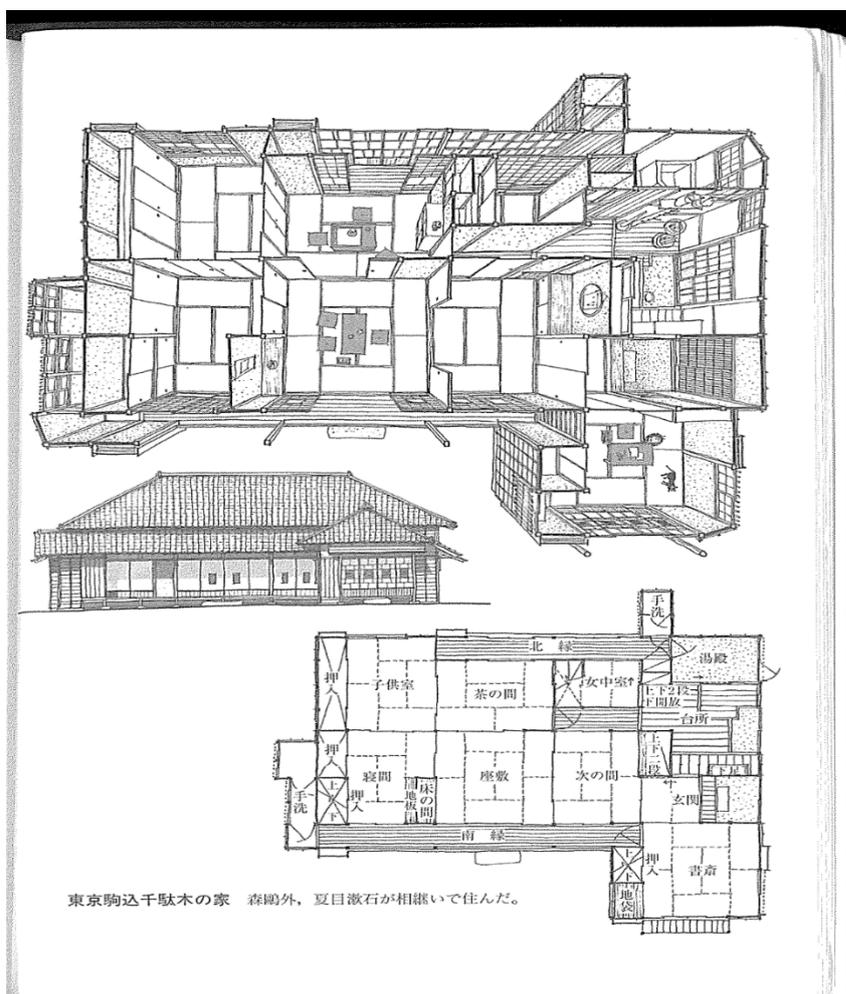
これらから分かることは、「家」と「家庭」は別物でありながら、「家」にも「家庭」にも属する人がいたりするなどお互いに切れない関係であり、その集団内の情緒的なつながりをもとにした「家庭」は、一代限りであるということである。日本伝統の「家を継ぐ」という引継ぎの感覚ではないという点で、「家庭」は新しい物であったと言える。

以上の家族観・子ども観は、家族が精神的つながりである愛情によって結び付けられ、子どもを大切にするという西洋の近代家族観と共通しており、日本の「家庭」像は、18世紀に先駆けてこの家族観を持っていた西洋の模倣であると考えられる。子ども部屋もまた西洋で誕生したものであることから、日本が子ども部屋を受容する前に、家族観・子ども観を西洋から受容していたことが推測できる。この「家庭」像の誕生が、日本に「子ども」の存

在の大きさを意識させ、子ども部屋への関心を強めていくきっかけになっていたのではな
いか。

2-1-2 明治期の間取り

家の形については、依然として日本の伝統的な形が主流であったが、西洋的な家の形が取
り入れられることもあった。吉田佳二は、『間取り百年:生活の知恵に学ぶ』において、森鷗
外、夏目漱石が相継いで住んだ東京駒込千駄木の家を例にとり(図 2-1)、



(出典)吉田(2004 :28)

図 2-1

昭和の初期まで、このタイプの住宅が都市の中間階級の純住宅として造られ続け
てきたのである。突出している客間が洋間となり、そこだけ急勾配の洋瓦葺屋根に

した和洋混在住宅が見られるようになるのも、この事例あたりが原型なのであろう(吉田 2004 :29)

と述べた。吉田が、この家の書齋が、書齋のない家では客間であった(吉田 2004 :29) と記述していることから、この家では書齋が洋間の作りになっていることが分かる。また、「部屋の配列は民家の系列の残像があるけれども、部屋の用法が機能的に定まってきている」(吉田 2004 :29)と述べていることから、この住宅は、使用方法が決まった個室化の先駆けであると見える。すでに子供室もあり、この時代に日本でもすでに子ども部屋を家の中に取り入れる人もいることが分かる。一部を洋式にすることや、使用目的の決まった部屋、子どもの部屋があることに、西洋化の風潮を感じる。西洋的な家族観・子ども観を受け入れたのと同様にして、明治時代から、家の形にも西洋的な様式が少しずつ取り入れられるようになった。

2-1-3 明治期の子ども部屋観

西洋の産物である子ども部屋が日本に示されたのは明治時代である。子ども部屋が日本に示されたきっかけを神野は、明治 30 年代の児童研究の高まり以降、博覧会や雑誌、百貨店を通じて盛んに子ども部屋が紹介されるようになった(神野 2011:142)と述べている。

博覧会の子ども部屋は、物珍しさと憧憬をまとめて人々に眺められた。観衆の多くは子どもの存在を啓蒙的に教え込まれるとともに、自分たちには馴染みのない洋風の生活様式にも、一層の関心を強めていった(同書 :145)

という神野の記述から、博覧会は人々が実際に具体的な子ども用品を見る機会として有効であった。小山静子も、『子どもたちの近代：学校教育と家庭教育』において、博覧会へ来た人々は、子ども向け商品を見ることによって、子どもには子ども向けの物が必要だと認識し、子どもへのまなざしを形成していった(小山 2002 :155)と述べた。当時、雑誌などでも子ども研究や子ども用品について書かれることはあったが、博覧会で実際に子ども用品を見ることで現実の物として受け入れ、子どもに与えるイメージが湧きやすくなるという効果があったのではないかと考えられる。

日本における子ども部屋の受容は、親たちの自発的に必要性に駆られたというより、西洋の近代的な家族観をいち早く察知した百貨店などの戦略的なマーケティングによる部分が大きいと言えるのではないだろうか。子ども部屋が売り手側の戦略によって消費者に知り渡ったことは、西洋と同様である点に注目したい。子ども部屋が誕生したとしてもひとりで広まってゆくのではなく、世間に知らしめるためには手段が必要であり、それが日本でも西洋でも販売者であったことが分かる。売り手側が世間に与える影響力の強さは、西洋でも日本でも大きいことが分かる。

博覧会や百貨店などにより、子ども部屋に対する興味は高まったが、普及率は低かったという点も明治時代の特徴である。その点を神野は、「日本の伝統的住居には目的が限定された専有の個室というものがあまり見られなかったこと、明治以降もこの集まりとしての近代的家族観を真に受容することはなかったことなどを考えるなら、当然のことと思われる」（神野 2011 :142）と考えている。西洋の文化を取り入れ始めたものの、日本に根付いた伝統的な考えや文化は簡単には変えられず、個室文化は定着しなかった。それらの西洋と日本の違いが、子ども部屋普及の障壁になっていたと考えられる。

2-1-4 明治期のまとめ

明治時代に西洋から日本に紹介され始めた子ども部屋と時を同じくして、家族観・子ども観や家の形も西洋のものが取り入れられ始めた。このころの日本には、西洋を模倣し西洋に追いつこうとする様子が読み取れる。したがって明治時代の子ども部屋の構図は、「家庭」という概念の受容により、家族が情緒的に結び付き、子ども重視の考え方になるという家族観・子ども観と、目的を限定した部屋や西洋的な家の作りという家の形・間取り観を取り入れ、子ども部屋ができる土壌の整った日本に、博覧会や百貨店などの売り手側がいち早く子ども部屋の必要性を説いたという構図(図 2-2)であると言える。ただ、西洋に近づいていると言っても、日本の伝統的価値観が残っていたため、子ども部屋の普及は進まなかったと言える。

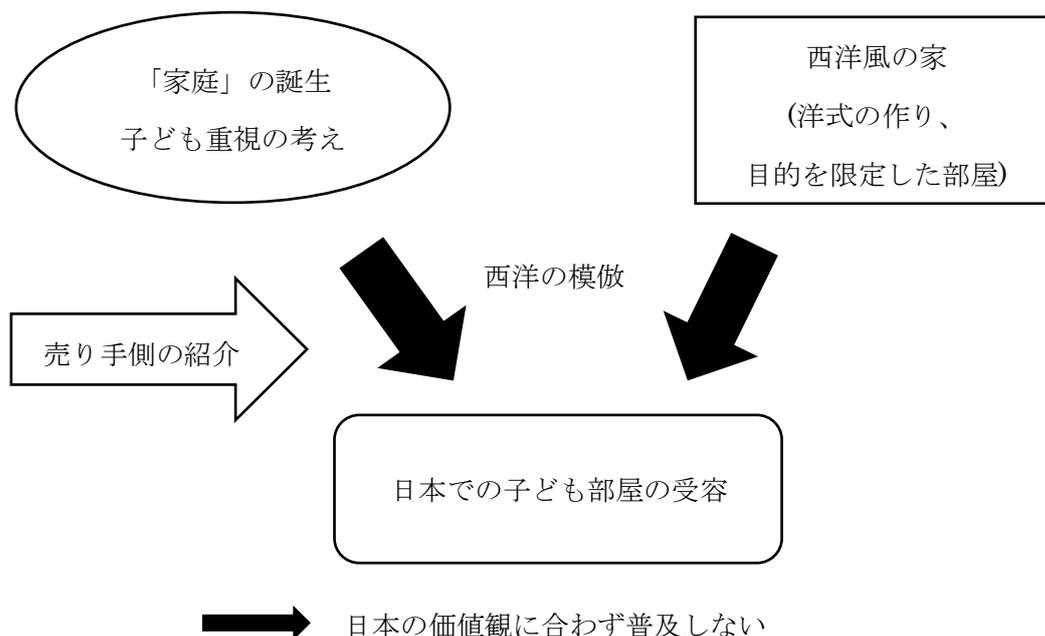


図 2-2

2-2 大正期の子ども部屋

2-2-1 大正期の家族観・子ども観

大正時代には、明治時代に知られるようになった子ども観が急速に広まっていく。神野はその理由を、子どもを独自の存在として認める児童研究の動きに、子どもを尊重し個人主義を実践するという大正デモクラシーの思潮が加わり、「子ども本位」という概念が生み出されていった（神野 2011 :152）からと述べている。大正時代に、学問や思想の影響により、子ども中心の家族というものが世間に広まっていく。より世間に説得力のある学者や政治的思想が、近代家族観・子ども観の普及を後押しする形となった。

また、小山によると、大正期の家庭教育書には、優生学についての言及がみられる（小山 2002 :162）という。小山は、子どもへの関心の高まりは、「よりよい」子どもを求める心性と結びついていた（同書 :164）、子どもの数を制限し、少数の子どもを手厚く保護し、教育を与えていくことが家庭における親の選択であった（同書 :166）と述べた。よりよい子どもが欲しい、そのためには教育が必要であるという考えの優生学の普及により、子どもの教育の

重要性が高まったのはこの頃からであった。

第1次世界大戦を経た日本では、家族の中で母親が子どもの教育の一端を担うべきであるという風潮が生まれ始める。その背景には、核家族化、性別役割分業化、学歴社会化が挙げられる。その点について小山は、

生産機能をなくした家庭にはもはや継ぐべき家業はなく、子ども、特に、男子は、学校教育—学歴を通して、自らの社会的地位を獲得していかなければならなかった。また、消費・再生産の場へと純化している家庭にとって主要な関心事は、子どもを産み育てることになっており、そこには専業主婦として子育てや子どもの教育に専念できる母親が存在していた(同書 :159)

と述べた。家庭が、祖父母など同居せず、家業を継ぐことなく、家から離れて雇われて給料をもらう職業へと変わるという近代家族化することで、性別役割分業と学歴重視の風潮が生まれる。働きに出るのは夫、家庭のことは妻という明治時代に生まれた性別役割分業の普及がさらに進み、家の中で子どもの教育を母親である妻に任せられるようになった。

子どもの教育に専念できるようになった母親たちは、子どものよりよい将来を案じ始める。家業を継ぐという概念の薄くなってきたこの時代では、子どもが自らの手で職を見つけなければならなかった。母親たちは、子どもが将来によりよい職に就くためには、勉強させ、学力をつけさせることが必要であると考えようになった。また、ここには、大正時時代の優生学思想も少なからず反映されていると考えられる。よりよい子どもを育てあげることが理想とされていたのではないだろうか。

天野は、『モノと子どもの戦後史』の「子ども部屋:子どもの目線がつくる空間」において、子どもの教育的成功を重視し、その教育環境の整備に細心の関心を払う母親が登場し、彼女らは、家庭教育は学校教育を補完するためにあるという教育意識を持っていた(天野 2007 :46) と述べている。教育重視の母親たちは、学校教育を一番に考え、自分たちの行う家庭教育は学校教育を補うためにあると考えていた。家庭教育で教育されていたことは、小山によると、「学校教育をより効果的なものにするために、家庭でも子どもにちゃんと勉強させ、成績に気を配っておくことが、親に求められていた」(小山 2002 :174-175)という。つまり、勉強というものを子どもの生活の中の一部にさせ、学校での学習を効率化させることが家庭教育の目的であったことが分かる。

明治時代の「家庭」の受容、子どもを重要視する価値観が児童研究や、大正デモクラシー、優生学思想によって大正時代に普及した。また、性別役割分業や家業の衰退によって、家庭の中の「母親」が、子どもを「教育」する風潮が生まれた。この家庭教育の普及が、子ども部屋の必要性を見出す鍵となる。

2-2-2 大正期の家・間取り

大正期には先ほど述べた子ども部屋の出現に大きな影響を及ぼす個室化が起こる。明治時代に子ども部屋の必要性が説かれた日本で、実際に家の形に変化が加えられるようになる。

日本では、元々公的な空間と私的な空間の区別のない家が主流であったが、大正時代に家族の私的空間を重んじる間取りが考案された。それが、「中廊下型住宅様式」である。天野によると、「中廊下型住宅様式」は、家の真ん中貫く廊下によって各部屋に独立性が与えられ、住宅内部に応接間などの公的空間と私的空間が分離される特徴を持つ新しい居住スタイルであり、大都市を中心に普及した（天野 2007:45）という。

廊下で仕切ることによって、各部屋を独立させるという居住スタイルであり、個室の概念のなかった日本で広まったのは、建築家たちによる力が大きい。『現代のエスプリ』の「子ども部屋をめぐる問題」において外山知徳は、

明治時代の住まいが余りにも接客空間を重んじ、家族の私生活のための空間をないがしろにしていたという認識が、当時の建築家をして日本ではじめての考案された住居プラン(間取り)とも言える中廊下型の住居プランといわれるものを提案せしめた(外山 1985:6-7)

と述べている。西洋的な思想を受容した日本で、西洋と同じ私的空間の重要性を察知した建築家たちによる提案であった。

中廊下型住宅様式について西川は、

中廊下型住宅はまず玄関横の書斎兼客間で外からの来客をくいとめている。書斎兼客間は夫の特権的な空間でもある。ついで中廊下によって女中部屋が隔離され、

各部屋の独立性が保証される。残る『茶の間』と『居間』が家族の団らんの空間、夜には就寝のための空間となった。中廊下型住宅またの名『茶の間のある家』は『家庭』家族を目に見える形に析出し、しかも外から区切られた狭い空間に夫にとって私生活と家族の団らんを保証、外で働いて収入を得る夫と家事育児に専心する妻の役割を分けることに成功したのであった(西川 2000 :33-34)

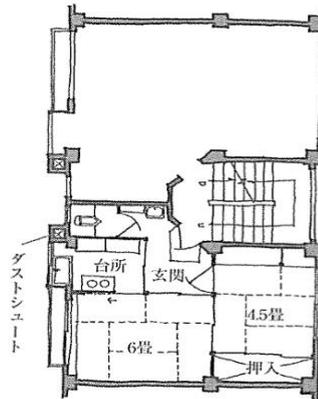
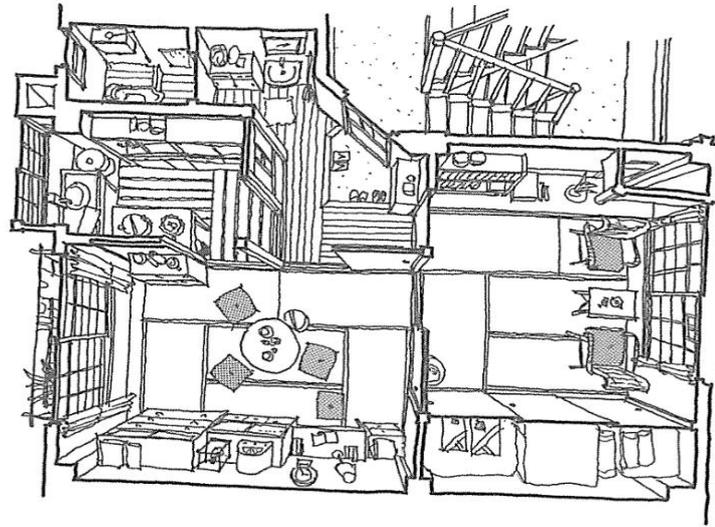
と述べている。個室化によって、公的な仕事とプライベートの分離、性別的な役割の分離、団らんと個人的な時間の分離なども進んだと言える。大正時代の家族観で重要な、私的空間の創設や性別役割分業を促進する間取りである。

日本には元より個室という概念がないことで明治時代には子ども部屋が普及しなかったが、「中廊下型住宅様式」の誕生により、家が私的空間になり家族の中に個室の概念が生まれ、子ども部屋という子ども専用の部屋が生まれる土壌が作られていく。

大正時代の家の内部の形について特徴的なのは、「中廊下型住宅様式」であるが、大正時代には家そのものにも変化があった。家の内外ともに大きな変化が加えられた時代と言える。

まず、中産階級が一戸建住宅を建て始めたことがある。吉田は、「大正年間になると、敷地も家も比較的小さい中産階級規模の都市的一戸建純住宅が、都市郊外に建てられ始める」(吉田 2004 :52)と述べた。中産階級による小さな一戸建住宅が作られ始めることは、一戸建住宅を作ることが比較的普及しているといえる。家を作ることが、高級なものというイメージから、一般の人にまで浸透していったことを表し、現在につながっているといえる。

また、アパートが作られ始めるのも、大正時代である(吉田 2004 :54)(図 2-3)。部屋数は2つしかなく、住む家族の人数の少なさが読み取れる。若い夫婦からなる家庭など、明治時代から生まれた新しい家族の形が広まってきた象徴であると言える。先ほど引用した西川が言うように、構成人数の多い「家族」から、人数の少ない「家庭」が増えてきたことを表しているのではないか。



東京渋谷区神宮前の同潤会アパートの一戸

55 2. 大正の全期

(出典)吉田(2004 :55)

図 2-3

2-2-3 大正期の子ども部屋

日本では、家庭教育の重要性が、子ども部屋を作り出すことにつながっていく。天野が、「子ども部屋が他にもない学習机に代表される勉強部屋として始まったという事実は、日本社会に独自の現象として興味深い」(天野 2007 :48) と述べている。日本での子ども部屋

は「勉強するため」という目的で作られた部屋であった。学校教育を補完するため、家庭で勉強する空間として子ども部屋は作られた。西洋と子ども部屋を作る動機が異なっている点に注目したい。西洋には、子どもに勉強させるために子ども部屋を作るという感覚は存在しない。

明治時代に日本に入ってきた子ども部屋は、日本の暮らしや伝統・文化に馴染まず、なかなか広まることはなかったが、家族観・子ども観が西洋化(性別役割分業、個人化)し、普及が進んだところで、日本オリジナルの目的を持った部屋として広まっていった。家族観・子ども観も、子ども部屋も西洋と同じものを取り入れてはいるが、日本オリジナルの要素を取り入れている点は興味深い。

2-2-4 大正期のまとめ

大正時代には、明治時代に取り入れた「家庭」の性別役割分業の推進や、家業を継ぐという概念の希薄化がすすみ、それに伴って新たに家庭内で「母親」が子どもを教育するべきという家族観・子ども観が家庭内に普及した。また、「中廊下型住宅様式」という建築様式の受容により、間取りも大きく変わった。この2つが、明治時代には子ども部屋が紹介されつつも普及しなかった明治時代と異なっている。大正時代には、これらの家族観・子ども観と間取りによって、日本独自の目的を持った子ども部屋が生み出され、日本でも馴染み普及していく。西洋を模倣するという構図の明治時代から、西洋を土台にしつつも、日本のオリジナルの価値観を織り交ぜているという構図が大正時代の構図(図 2-4)である。

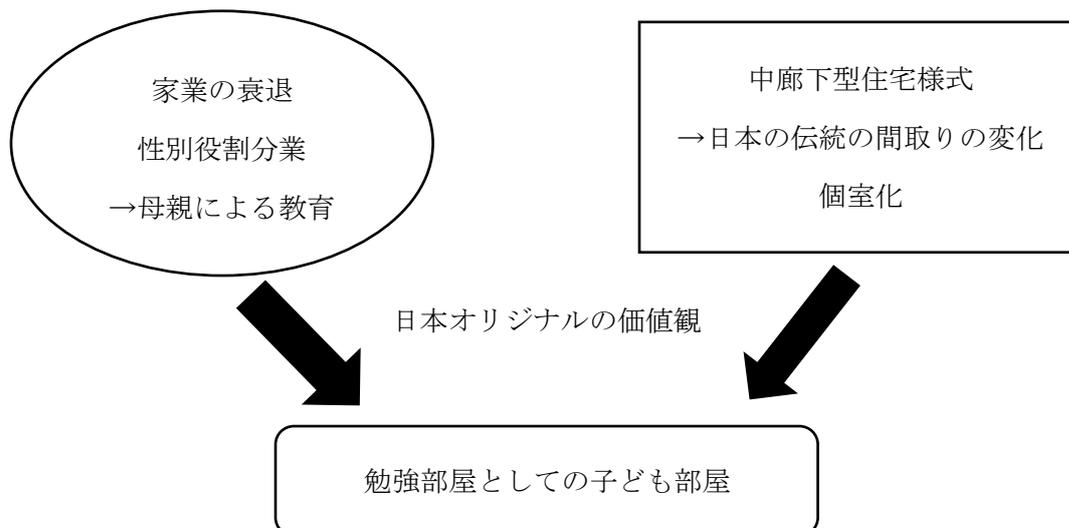


図 2-4

2-3 第二次世界大戦後の子ども部屋

2-3-1 第二次世界大戦後の家族観・子ども観

第二次世界大戦は、大正時代の家族観・子ども観の普及が進み、子どもが勉強することの重要性が強まる。この時代にはすでに、大正時代の性別役割分業や子どもを母親が教育するなどの家族観・子ども観は、世の中の人々にとって珍しいものではなくなり、家族の中に一般化していた。

1950年代は、「家族内のコミュニケーションと、子どもが好きなきに『一人でいられる』個室文化とのバランスが取れていた」(天野 2007:54)という。このころの子ども部屋は子どもにとって一人になれる場所ではあるが、家族と一緒に過ごす時間もあった。「食卓や居間での家族団欒を求める心情と、自分の部屋をもちたいという欲求とが、子どものなかで矛盾なく接合されていた」(同書 :55)ことから、この頃はまだ、家族内のコミュニケーションが問題視されることはなかった。

天野によると、1960年に子どもだったベビーブーマー世代は、将来、サラリーマンのなることを当然のことと考えるようになった最初の人々である(同書 :53)という。天野は、「親から引き継ぐ家業や家産をもたないサラリーマンにとって、職業につく手段は学歴しかない」(同書 :53)と述べ、第一次世界大戦後から家業を継ぐ概念の薄れていた日本では、職業と学歴を同時に考える思考が一般化していた。

1970年代に入ると、テレビや電話の当たり前の社会が出来上がる。また、核家族化が進み、地域コミュニティの概念も薄くなる。

都市化と郊外化がすすむなかで従来のコミュニティがくずれ、近隣とのつきあいや「おすそわけ」の慣習も消滅していく。それぞれの家族が地域社会から閉ざされていくとともに、電話機やテレビによって外部の情報社会とつながっていく(同書 :57)

と天野は述べた。それまでの社会とは、地域で作るものであったが、情報がもっと広いところから受けることができるようになると、社会は地域にとどまらなくなる。社会が広がって

いくことで、身近な社会との関わりが希薄化する。

第二次世界大戦後から 1970 年代にかけて、核家族化が進んだ。明治時代に家族が私的空間に生きるようになったが、個室化した大正時代を経てその個人化の流れが進んでいることが分かる。また、大正時代に母親が子どもを教育する流れが生まれたが、第二次世界大戦後には学歴重視の考え方が強まる。サラリーマンになることが一般化し、よりよい職に就けるように学歴を求める風潮が強まった。

2-3-2 第二次世界大戦後の間取り

第二次世界大戦後は、間取りの変化が大きかった。また、家そのものへの人々の意識も変化する時代であった。

まず、ダイニングキッチンの創設が挙げられる。1950～60 年代の間に、家庭電化製品が登場し、台所や家事の方法に大きな変化がなされた。このことに関して吉田は、

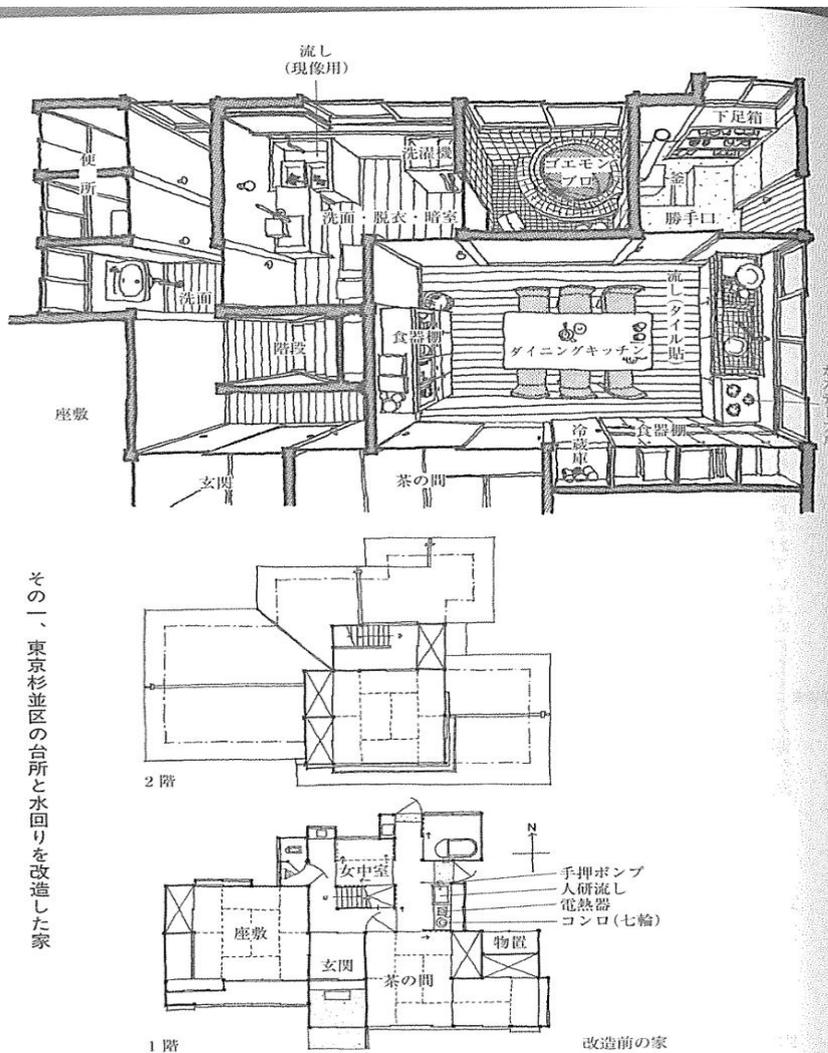
これらの機器を買い求めたとしても置き場がない。台所は前章までに見てきたとおり、全く前時代的な様相をしている。家を建て替えることはできないが、台所や水回りを改造する程度の工事ならできる。これがこれまでの台所をダイニングキッチン=DK へと変貌させた巨大なエネルギーになった(吉田 2004 :93-94)

と述べた。図 2-5 を参照する。図 2-5 を見ると、流しはタイル張りになり、ガステーブルも備わっている。ダイニングキッチンには冷蔵庫や食器棚もあり、家事のやすさがみとれる。今までの家をリフォームして新しいダイニングキッチンを作ることで、家庭電化製品を使える空間を作り、家事をそれまでよりも楽に行うことができるようになった。

また、このダイニングキッチンは、女性に大きな影響を与えた。吉田によると、

台所革命は、それまでの台所や水回りなどが、あまりにも貧弱きわまるものであったための必然的結果だが、これを引き起こした原因には、戦後の民主化傾向の産物である女性の社会的地位の向上があつて、家事奴隷とまでいわれた主婦の家庭内労働からの解放という意義を持った行動であった(同書 :99)

という。女性の家事をする時間を短縮し、女性が家事以外のことをする時間が増える。このことは、子どもに目を向ける時間の増加を意味するのではないだろうか。家事時間が減ったことによって、家事以外に子どもの教育を担えるようになったのではないかと考えることができる。



その一、東京杉並区の台所と水回りを改造した家

95 5. 台所革命の時代

(出典)吉田(2004 :95)

図 2-5

次に、寝室の変化である。西川は、「公団住宅の第1期（一九五五～六四年）を代表す2DK設計は狭いながら、ダイニングキッチンを入れて寝食分離、寝室を二つとることにより夫婦と子どもの分離就寝を実現した」（西川 2000 :53）と述べた。2DKの2は、寝室が2つあることを示す。2つの寝室は、親と子どもが別々に寝ることを表し、子どもに専用の部屋が与えられていることを意味する。子どもと親が別々で寝ることが2DKという言葉で表されるほどに一般化し、ここに子ども部屋の普及を見ることができると述べている。

1965年から1974年にかけて先ほどのダイニングキッチンに変化が起こる。2DKに続いて、

第二期（一九六五～七四年）にダイニングキッチンはダイニングリビングキッチンへ進展、子どもに個室を与えて、2LDK、そして3LDK設計が完成した。以降、nLDK設計の「リビングのある家」モデルは公団住宅だけでなく、マンションの設計、一戸建て住宅設計の基本となった(同書 :53)

ことを西川は述べている。ダイニングキッチンにリビングをつけた、ダイニングリビングキッチンの出現である。「リビング」という家庭の中で家族の集まる空間が用意される。個室化、個人化の動きと対照と考えられる「リビング」の創設は、大正時代までに起こった個室化の動きの反動で、家族が団らんする空間の必要性が感じられてつくられたのではないかと述べている。子どもに個室を与える代わりに、家族が集まって団らんする空間も必要であるという意識が読み取れる。

また、1970年代から1980年代にかけて住宅メーカーの台頭が起こる。住宅が、既製品化され始める。吉田は、

ハウスメーカーが台頭し、現場作業で手作りするのではなく、既製品化された部材を組み立てるだけで、需要者と建てる土地の個別的な要素を考えてはいるが、家自体は既製品となっている(吉田 2004 :149)

と述べた。人々にとって、家を建てるのが珍しいものではなくなり、多くの人が建てるようになった結果であると考えられる。

ここにはそもそも、需要者の意識の変化が表れている。吉田によると、「以前は家を建て

るに際して『今度、家を建てることにした』と表現したが、既製品化してそれが『家を買うことにした』に変わったのが、意識の変化を如実に物語っている」（同書：150）という。家は「建てる」から「買う」ものになった。人々が自分の家を持つことに対する意識が、「建てる」と考えられていた時よりも珍しいことではなくなった。「買う」という言葉から分かるように、身近な消費行動の一部と捉えられるようになった。したがって、「買う」ものである家を消費者が購入する際、販売者である住宅メーカーの存在は大きくなってゆく。この住宅メーカーの台頭は現在まで続いており、現在では、住宅メーカーを通して家を作ることが一般的になっている。現在では、家と住宅メーカーは切っても切れない関係であると言える。

台所革命により、家事から解放された女性が、今まで家事に使っていた時間を子どもの教育に充てられるようになった。このことが、家庭教育重視に影響を与えていると考える。また、DKやLDKモデルの提案により、子どもと親の部屋を分けることがあらかじめ間取りに組み込まれるようになった。子ども部屋の普及が見て取れる。子ども部屋の普及とともに、リビングで家族の集まる空間を作ることが必要だということも考えられるようになった。住宅メーカーの台頭により、人の家に対する価値観が変わった。家を「買う」ことが一般の人に身近なものになった結果であると言える。

2-3-3 第二次世界大戦後の子ども部屋

1950年代の子ども部屋は、勉強部屋という役割とともに、物置として使われるようになった。天野は、「子ども部屋とは、市場を支配する交換価値から解放され、子どもが自分の分身であるモノと戯れる暮らしの化合物の場、夢とアマルガム空間の別名であった」（天野2007：55）と述べた。子ども部屋は、子どもが自分の好きな物を収集し、没頭するための場という役割を持っていた。この時すでに勉強部屋として子ども部屋を与えた親が想定していなかった子ども部屋の使い方が子どもによってされ始める。子どもは、親の目から離れた子ども部屋で自分のやりたいことをし始めていた。

1960年代になると、子ども部屋は大衆化するようになる。「子ども部屋は、戦後のベビーブーム期生まれ（一九四七～四九）の子どもたちが一斉に中学ないし高校への進学期を迎える一九六〇（昭和三五）頃から、急速に一般化していく」（同書：52）と天野は述べている。子ども部屋が、経済的に余裕のある家族だけでなく、一般の人々も持つようになった。

1960年代に一般化した子ども部屋は、1970年代になると、所有率が急速に高まる。天野

は、この時代について「日本の小学生の七六%が自分の個室をもっており、その比率はアメリカをはじめとするどの国よりも高い」（同書 :58）と指摘している。この時代になると、勉強部屋としての子ども部屋が日本において当たり前の感覚になってきたといえる。また、子ども部屋の誕生した西洋よりも普及している点は興味深い。こうしてなかなか日本で定着しなかった子ども部屋は、1960年代に一般化し、1970年代には家の間取りの中でごく普通の存在となっていった。

天野は、1970年代には、一般家庭に電話が定着した(同書 :56-57)、時を同じくして、子ども部屋にも電話が備えられたり、ベッドが設置されるようになる(同書 2007 :57)と述べた。子ども部屋にさまざまな「モノ」が置かれ始める。電話やベッドなど、子ども部屋から出なくても生活ができるような快適な環境が整えられる。

第二次世界大戦後には、子ども部屋を多くの人を持つようになり、その所有率は世界で一番であった。また、勉強部屋として作られた子ども部屋は、勉強する以外に子どもの趣味の部屋になったり、テレビを見たり、ベッドで寝たりという勉強以外のことができる場にもなっていた。

2-3-4 第二次世界大戦後の子ども部屋のまとめ

第二次世界大戦後は、母親による学歴を重視した家庭教育が一般化したことと、核家族化の進行という家族観・子ども観と、子どもに専用の部屋を与えることが考えられた DK や LDK モデルという間取りによって、子ども部屋の普及が進んだ時代である。子ども部屋の普及はどの国よりも高くなった。ここから、子ども部屋が多くの子どもの行き渡った結果、子ども部屋が多様化するという構図(図 2-6)が読み取れる。子ども部屋が勉強以外のことをする空間になり、子ども部屋を与えた親が想定していなかった使い方がされるようになった。

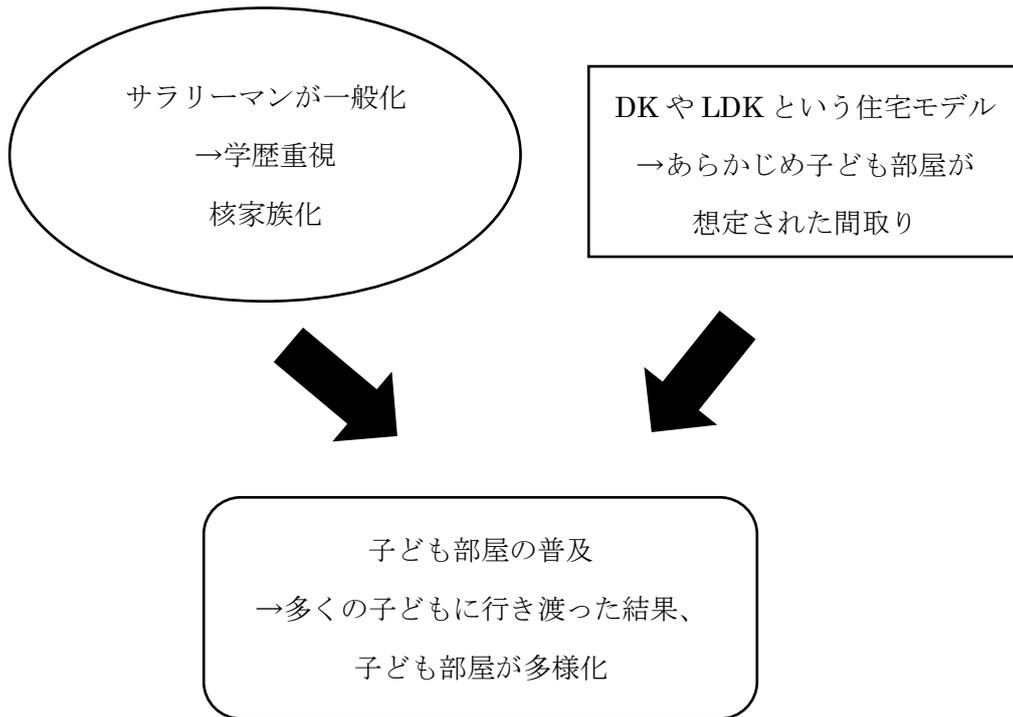


図 2-6

2-4 第2章のまとめ

明治時代から 1970 年代までの子ども部屋が普及した時代全体の構図は、西洋での子ども部屋の誕生の歴史と同様に、家族観・子ども観と家の形・間取り観が子ども部屋を誕生させたという構図(図 2-7)になる。「家庭」の誕生による家業の衰退や、性別役割分業による母親が育児を担うようになったことが、母親が家庭で子どもに勉強させるという家族観・子ども観を生み出した。その家族観・子ども観と、日本人に合った「中廊下型住宅様式」という個室化の間取りの創設という家・間取り観の土壌から、子どもが家の中で勉強に集中できる場所として子ども部屋が生まれたという構図が読み取れる。西洋の構図と異なるのは、勉強を目的とした点である。この子ども部屋が、核家族化や学歴重視という家族観・子ども観や、DK や LDK という子どもと親の寝室を分けるという家・間取り観の後押しによってさらに普及していく。

明治時代から第二次世界大戦後の 1970 年代までのこの構図は、子どものよりよい将来のために子ども部屋が必要であると考えている親や大人の目線の構図である。親のコントロール力、支配力が強く働いた結果の産物なのである。家族が私的空間化し、子どもが家庭内労働力ではなくなった結果、子どもを重要視するようになった。子ども側の意見よりも、親

が「子どもにこうなってほしい」という理想像を目指し、子ども部屋を与えていることが、親目線であり、2章での構図であると言える。

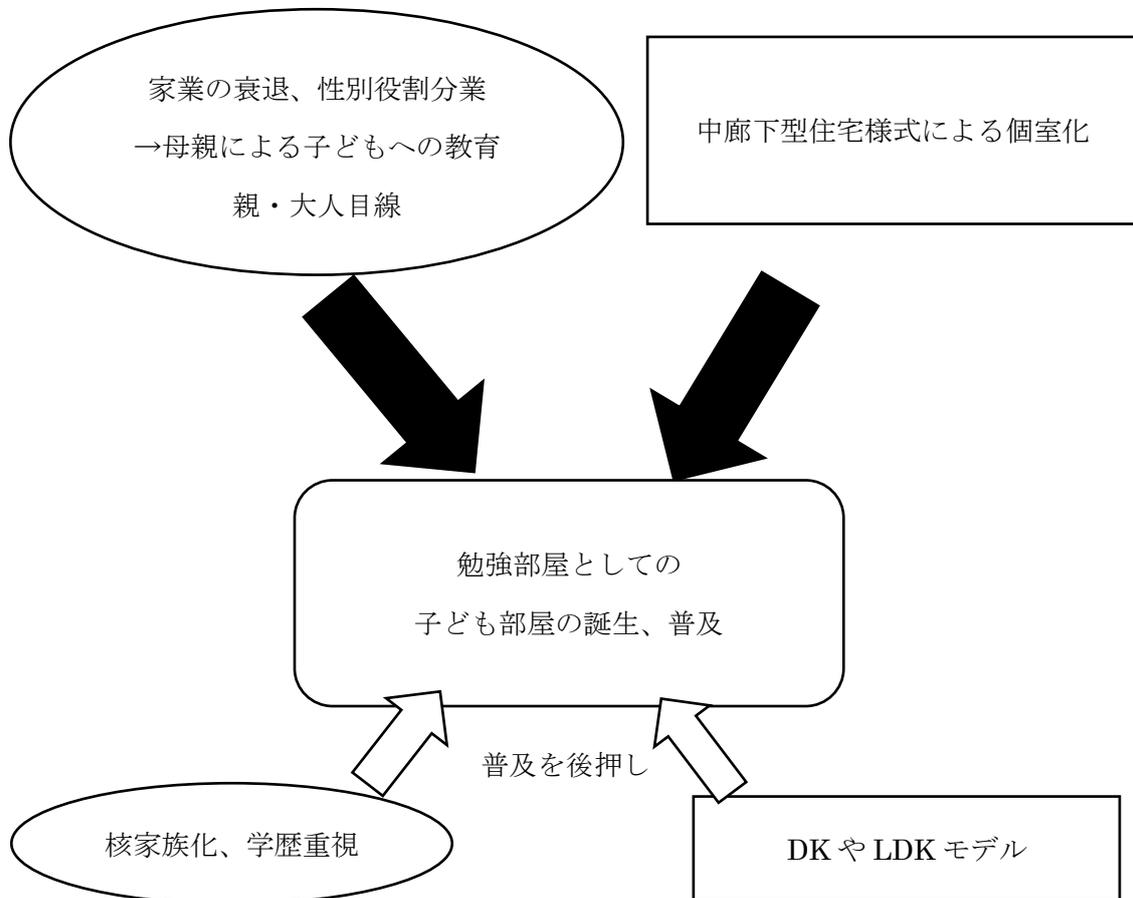


図 2-7

第3章 1980年代の子ども部屋 子ども部屋批判論が台頭してきた背景

この章では「子ども部屋批判」が生まれてきた背景を探る。明治時代から1970年代までの時代は、親や大人たちが子どもに子ども部屋を与えるべきだと考え、子ども部屋が普及した時代であった。しかし、1980年代を中心として、子ども部屋は子どもにとって良くない、子どもには必要ないという意見が生まれてくる。その意見は次第に世間に広まり、様々な文献やメディアを通して語られてゆく。この章では、「子ども部屋批判」の子ども部屋観の構図を分析し、前時代と比較することで、前時代と正反対の意見が生まれた原因を探る。

まず、1980年代当時の子ども部屋の所有率を参照する。子ども部屋が批判される時代に、

どのくらいの子どもに子ども部屋が与えられていたのか、当時の子ども部屋事情を探る。

次に、「子ども部屋批判」についてその議論の広まったきっかけである、羽仁説子の『子ども白書・一九八〇年版』と住まい文化推進キャンペーンのアンケートを参照する。「子ども部屋批判」はどのような過程を経て高まったのかを考える。

また、1980年代当時に問題視された不登校・引きこもりや、少年犯罪について議論される中で、それらの問題が子ども部屋の影響によるものだと子ども部屋が批判されるようになった。ここに、西洋での子ども部屋の誕生や、明治時代から1970年代までの子ども部屋が積極的に作られていた時代と同様に、子ども部屋に子どもへの意識、つまり子ども観や家族観が反映されていると考える。したがって、次に、引きこもり・不登校と少年犯罪を統計データや新聞記事を参照し、当時の子ども観を解き明かし、「子ども部屋批判」がなぜ生まれたのか、その本質は何かを考えてゆく。

また、「子ども部屋批判」に対し、疑問を投げかける意見も生まれる。これらを「子ども部屋批判・批判」と位置づけ、「子ども部屋批判」と「子ども部屋批判・批判」との構図を考える。子ども部屋が積極的に作られていた明治時代から1970年代までと、子ども部屋は子どもに与えない方が良く考えられていた1980年代という両極端な時代を経て新たに生まれた「子ども部屋批判・批判」は、どのような子ども部屋観を持っていたのか、「子ども部屋批判」と対比の中で分析する。「子ども部屋批判・批判」の意見は、『現代のエスプリ』を参照して分析する。『現代のエスプリ』は子ども部屋に関する論文を集めており、全体が「子ども部屋批判」の何が批判されるべきなのか、子ども部屋はどのように捉えられるべきなのかを述べているため、この資料を参照する。

3-1 1980年代の子ども部屋所有率

1980年代は、子どもはどのくらい子ども部屋を持っていたのか。1983年の子ども部屋の所有実態を調査した資料がある。ベネッセ総合研究所の『モノグラフ・小学生ナウ:1984年度 VOL.4-1 子ども部屋』という小学生の実態調査に子ども部屋の調査があった。調査レポートは、深谷和子と塚本恵美子によって書かれ、昭和58年に東京・千葉・埼玉・茨城の小学4・5・6年生を対象に行われた(深谷・塚本1984:7)。子ども部屋を持っているのは、84.5%であり、そのうち31.3%がひとり部屋、44.3%がきょうだいと2人の部屋、8.9%が3人以上の部屋であった(深谷・塚本1984:9)。きょうだいと同じ部屋の子どもの多いが、

子ども部屋を持つ子どもは8割を超え、子ども部屋の普及が読み取れる。1980年代に、子ども部屋が批判されたのは、この高い普及率が背景にあることが考えられる。多くの子どもが持つようになったことによって、問題視される子どもの数も増えたのではないだろうか。

3-2 子ども部屋批判論とは

そもそも、子ども部屋批判論はどのようにして生まれたのか。子ども部屋批判論の発端とされているのは、天野によると、羽仁説子編の『子ども白書 一九八〇年版』と「住まい文化キャンペーン推進委員会」の行ったアンケート調査である(天野 2007:59)。

この文献において羽仁は、子ども部屋が、子どもの非行のたまり場になっている(羽仁 1980:204)ことを指摘した。また羽仁は、親は子どもが部屋にこもっていると、勉強していると安心するが、実際の子どもは音楽を聴いたり、テレビを見ているため夜型の人間になる(同書:204-205)という面にも注意を促した。

羽仁の指摘した子ども部屋に関する問題点は、親子の関係性の問題点であると言える。羽仁によると、子ども部屋を与えると、親が子どもの部屋に入ることを遠慮したり、子どもが部屋に鍵をかけて親を入れないようにしたり、子ども部屋にこもって食事も一緒にとらなくなる家庭もある(同書:204)という。子ども部屋が親子間のコミュニケーションの壁になっていることから、子ども部屋を批判するという構図である。この問題点は、それまでの時代の子ども部屋観をがらりと変えていくものであった。2章で述べたように、1970年代までは子ども部屋を持ちつつも、子どもは家族との団らんの時間も持っていたため、子ども部屋が批判されることはなかった。

また、「住まい文化キャンペーン推進委員会」は、1983年に野村総合研究所に委託し、東京、大阪、仙台の小学四年生から中学三年生の子どもがいる世帯で調査した(毎日新聞 1983.11.17)。小学校低学年時までに62.6%の子どもは部屋を持っているということ、平日に家族全員で過ごす時間が、子ども部屋のない家よりある家の方が30分近く少ないということ、子供部屋のない家よりもある家の方が、月に家族そろっての夕食の回数が二回少ないということを発表し、子ども部屋が一家の団らんの時間を少なくし、家族間コミュニケーションを減らしている(毎日新聞 1983.11.17)と述べた。実際に行われた調査、数字が明確に表れた調査は、子ども部屋が子どもに悪影響を与えることの裏付けとなり、子ども部屋批判論は世間に浸透した。また、子ども部屋のない家と子ども部屋のある家を比べることで、子

も部屋の悪い面を際立たせている。

これらの子ども部屋批判論は、この後も続いていく。1998年には、文部科学省生涯学習政策局政策課の中央教育審議会答申で、

今日、子どもたちが子ども部屋に閉じこもってしまい、親の注意が行き届かなかったり、親子の会話が減ってしまうというようなことも目立ってきている。親の気付かない間に、もしくは目を背けてきた間に、子ども部屋が犯罪の場になってしまう例さえ見られる(文部科学省生涯学習政策局政策課 1998)

と述べ、文部科学省も子ども部屋批判派の意見を述べている。犯罪の例を挙げていることから、国としては少年犯罪の増加から子ども部屋に危機感を持ったのではないか。

これらが子ども部屋批判発端であると言われているが、それ以前にも子ども部屋について批判されることはあった。新聞で子ども部屋批判論が展開されている時期を調べていると、1970年代から存在した。数回にわたって特集が組まれ、子ども部屋に対する議論がすでに始まっていた。

朝日新聞では、1978年5月8日から5月18日まで5回に渡って「子ども部屋」というコーナーがある。このコーナーを作ったことについて、1978年5月8日の記事に「独立性が、逆に“悪用”されて非行の温床になったり、子ども部屋をめぐる問題は少なくない」(朝日新聞 1978.5.8)からと述べている。子どもの問題と、子ども部屋の関係性について提起している。羽仁の述べた非行と子ども部屋の関係性について、羽仁よりも先に述べている。

「子ども部屋批判」は、子どもの非行、子どもが部屋に引きこもってしまうこと、またそれに伴い、家族で過ごす時間や、家族間のコミュニケーションが減っていることを問題視し、その原因が子ども部屋にあると考えたものである。ここから、「子ども部屋批判」は、子どもが部屋に閉じこもってしまうことによって起こる様々な問題に目を向けたものであることが分かる。羽仁や住まい文化キャンペーン推進委員会が「子ども部屋批判」の起源であると言われているが、新聞では、複数の誌面で子ども部屋議論が1980年代以前にも展開されていた。この事実から考えると、それまでも子ども部屋の有無について疑問を抱いていた人々は存在していて、新聞で論じられることはあったが、羽仁の子ども白書や住まい文化キャンペーン推進委員会のアンケート調査があった1980年代に、子どもに関する社会問題が起り、その原因が子ども部屋にあると考えられたため、「子ども部屋批判」が世間に広ま

っていったのではないだろうか。この社会問題と子ども部屋の関係については、3-3 で述べる。

3-3 1980年代の子どもに関する社会問題

前章までに見てきた通り、子ども部屋論にはその時代の家族観・子ども観が大きく影響する。前節 3-2 の羽仁説子の『子ども白書 一九八〇年版』や住まい文化キャンペーン推進委員会のアンケート調査も、子ども部屋を批判するうえで、少年非行や引きこもり、家族間のコミュニケーションの不足といった家族観・子ども観について言及していた。したがって、1980年代の子ども観は、子どもの引きこもり・不登校と、少年犯罪の分析によって捉えることにする。子ども部屋が批判される背景となり、「子ども部屋批判」議論の盛り上がった1980年代の子ども観を、統計データや新聞記事を紐解くことで考えていく。

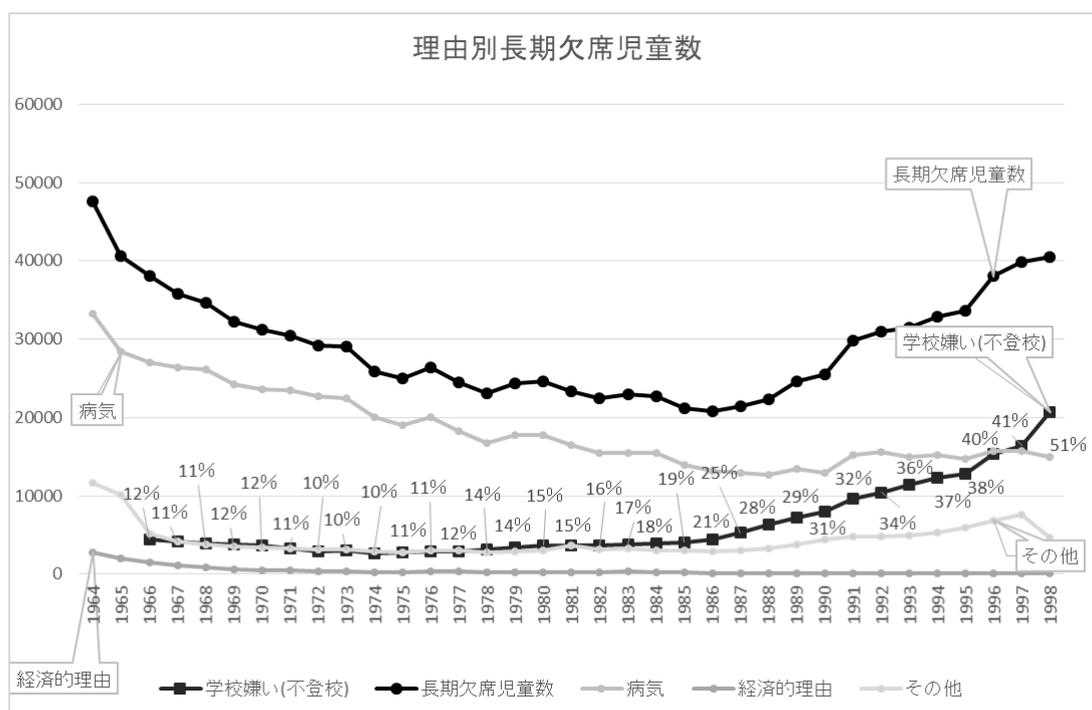
3-3-1 不登校・引きこもり

1980年代に子ども部屋批判が高まった背景には、天野は、

自閉症や不登校、さらには『ひきこもり』現象が社会問題視されはじめ、それらの原因を子ども部屋に求める言説が勢いを増し始めたからである。子ども部屋が外部の緊張から逃避し、ひいては閉じこもる『アジール』や『シェルター』の役割を果たしている点が批判的になったのである(天野 2007:59)

と述べている。自閉症、不登校・引きこもりの子どもに関する問題の原因を、子どもが外部との接触を断ち、自主的に閉じこもることができる子ども部屋にあると考え、子ども部屋が批判されるようになったという流れである。

「学校へ行かない・行けない」子ども、部屋の中に閉じこもる子どもが注目されるようになったのは1980年代からである。それまでも、学校へ行けない子どもは存在していた。しかし、その理由は、1980年代の子どもと異なる。ここで、文部科学省生涯学習政策局政策課調査統計企画室の『学校基本調査』を参照する。そのなかの1964年から1998年までの理由別長期欠席児童数の数値をグラフ化したものが図3-1である。学校嫌い(不登校)の折れ線の上下にある数字は、長期欠席児童数全体における、学校嫌い(不登校)の割合である。



(出典)『学校基本調査』1964～1998 をもとに筆者作成

図 3-1

長期欠席する理由としては、病気、学校嫌い、経済的理由、その他で分類されている。

まず、図 3-1 を見て長期欠席児童数全体の変遷をたどる。長期欠席児童数全体としては、1960 年代が最も多く、1970～80 年代にかけて急速に低下している。この流れとほぼ並行して病気が理由で欠席する児童数も減っているため、全体的な欠席児童数の低下は病気欠席の児童の減少が原因であると考えられる。しかし、1980 年代後半から長期欠席児童数全体がまた増えている。病気欠席の児童数は、若干増える年もあるが、全体的な流れとしては減っているため、長期欠席児童数の全体的な増加は、学校嫌いの生徒の増加と考えられる。実際に学校嫌いの生徒数は、1980 年代半ばから急速に増え続けている。

学校嫌いで欠席する生徒の増加は、長期欠席児童数全体に対する割合を見るとより顕著である。図 3-1 から、1960 年代から 1970 年代前半にかけては、病気が理由で欠席する児童が大半であり、学校嫌いが理由で欠席する児童は 10%程度にとどまっている。しかし、1970 年代後半から、学校嫌いで欠席する児童の割合が徐々に高まる。引きこもりや不登校が問題となった 1980 年代は、実際にその数は増え、1986 年には 20%を超えている。その後も学校嫌いの児童数は増え、図 3-1 を見ると 1997 年には病気欠席の児童数を越え、さ

らに 1998 年には、長期欠席児童の半分以上が学校嫌いであるまでに至った。

引きこもりや不登校が問題となった背景には、1980 年代以前と欠席に対する意識が変わったからであると考えられる。それまで長期的に子どもが学校を欠席する原因は、病気や経済的理由が主であった。『学校基本調査』でも、学校嫌いの調査は 1966 年より始まっており、それ以前には学校嫌いという項目はなかったことから、学校嫌いはその他に分類され、大きな要因として視野に入れていなかったことが考えられる。しかし、学校嫌いという項目が登場し、次第にその割合が増え始める。図 3-1 の割合を見ると 1966 年から 1986 年の十年間、間に 10% も急速に増えている。1960～70 年代前半の子どもたちは、自らの意志で学校へ「行かない」というより、病気で「行けない」という側面が強かった。1970 年代後半からは学校嫌いつまり不登校という、自らの意思決定で学校へ「行かない」、「部屋に閉じこもる」という選択をする子どもが増えた。この学校嫌い・不登校による長期欠席は、前例がなかったため、社会問題として取り上げられるようになったのではないだろうか。

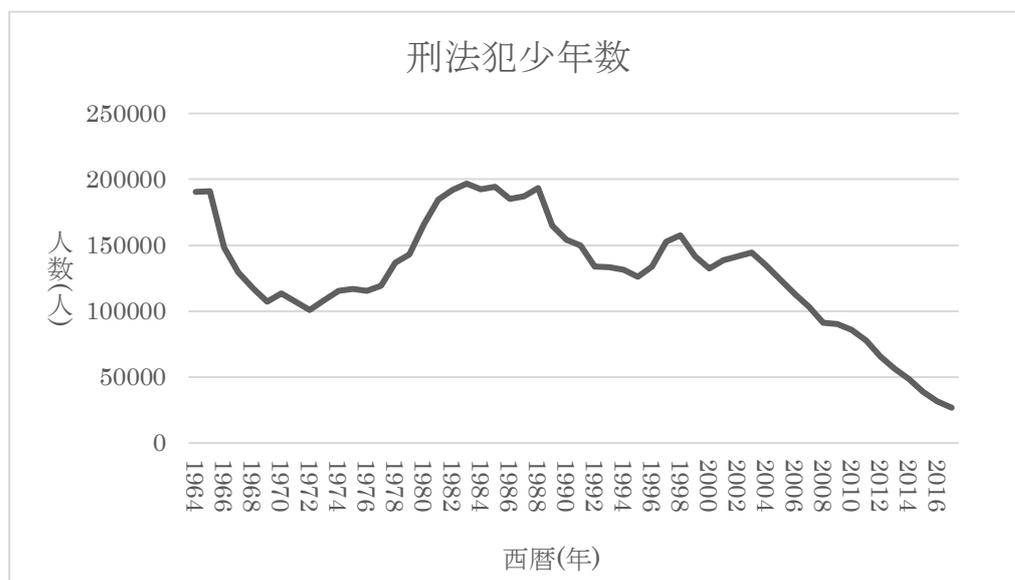
子ども部屋が不登校・引きこもりの原因だと批判されるようになったのは、ただ不登校・引きこもりの子どもの数が増加したからではない。子どもが子ども部屋に引きこもってしまうと、親たちは子どもが子ども部屋で何をしているのか見えなくなるという問題点から子ども部屋は批判された。羽仁は『子ども白書 一九八〇年版』において、ある中学生とその両親の例を挙げた。両親が子どもを勉強させるためにアパートの部屋を借りると、子どもは食事以外の時間は全て自分の部屋で過ごすようになり、部屋に鍵をかけていたため、子どもがどんな生活をしているか分からなくなっていた(羽仁 1980:204)という例を挙げ、子ども部屋の危険性を強調していた。子ども部屋に鍵がついていたり、勉強の邪魔にならないように子ども部屋に入らなくなると、子どもは親の目から離れてしまう。1980 年代に不登校・引きこもりが増加したことで、親の目の届かないところにいる子どもが増加した。子どもを見守ることができなくなった不安が、子ども部屋を批判する要因の一つになったのではないだろうか。

3-3-2 少年犯罪

また、少年犯罪について報道されるときに子ども部屋を絡めて述べられるようになった(天野 2007:59-60)ということも述べられている。

1980 年代に入り、少年犯罪は急激に増加する。ここで、内閣府の『子供・若者白書』を

参照する。警察庁の刑法少年数を年ごとにまとめた表が『子供・若者白書』内にあり、こちらの資料を参照する。『子供・若者白書』をグラフ化したものが、図 3-2 である。



(出典)『子供・若者白書』平成 30 年度版をもとに筆者作成

図 3-2

グラフを見ると、1960 年代に多かった刑法犯少年は、1970 年代には急激に減少していることが分かる。1970 年代後半にまた急激に増加し、1980 年代全体は、200000 人と届きそうな状態が続いている。そのあと 1990 年に入ると減少し、年によっては増加することもあるが全体的には減少傾向にある。このグラフを見ると、1980 年代の刑法少年数がほかの年代と比べて飛びぬけて多いことが分かる。この刑法少年数の多さが、大人の頭を悩ませていたことが推測できるが、なぜ子ども部屋にその原因があると考えられるようになったのか。それは、1980 年代には、子どもの起こす凶悪犯罪が報道されるとともに、子ども部屋がクローズアップされたからである。ここから少年犯罪の詳細は、主に山本健治の『[年表] 子どもの事件 1945-2015』を参照し、当時の新聞でどのように報道されていたかを見てゆく。

山本は、1988 年、東京・目黒の中学 2 年が教育に厳しく冷たかったという動機で、金蔵バットで襲いかかったが、父に取り上げられ、包丁で父を 37 回、母を 72 回、祖母を 56 回刺し殺害した(山本 2015:174-175)と述べた。中学生の一家 3 人を殺害する例はそれまでの日本の犯罪記録ではなく、学校関係者や家庭に大きな衝撃を与えた(毎日新聞 1988.7.9)と毎日新聞では報道している。この事件と子ども部屋の関係性は、凶器である包丁と金属バットをあらかじめ自室に持ち込んでいた(毎日新聞 1988.7.9)という点である。親が立ち入る

このない子ども部屋の閉鎖性が犯行に絡んでいることがこの事件の特徴である。3-3-1の不登校・引きこもりの節で述べたことと同様に、子どもが親の目の届かない空間にいる危険性がクローズアップされた事件と言える。

特に子ども部屋で犯行が行われた事件は世間を騒がせた。山本によると、1988年11月、東京都・綾瀬の少年グループが、17歳の女子高生を車ではね、ホテルに連れ込み強姦後、犯行の中心の少年宅に41日間監禁し惨殺したのち、89年1月4日遺体をドラム缶に詰め、コンクリートを流し込み江東の海浜公園に遺棄した(山本 2015:180)。山本は、この事件について、「日本青少年犯罪史上、類を見ない残虐犯罪」(同書 :180)と述べている。この事件では、逮捕された少年の両親が、自分の子どもが不良少年のたまり場になり、女性が連れ込まれていることを知りながら、親が子ども部屋に入ること、子どもを監督することができなかった(毎日新聞 1989.4.3)という。この事件では、少年らの残虐性と、殺人が子ども部屋で起こったこと、親が子どもを注意できなかったことが問題視されている。この事件が契機となり、子ども部屋に入ることができない親たちの存在が浮かび上がってくるようになった。

また、未成年の犯罪ではないが、自室が問題視された事件もあった。山本は、1989年26歳の男が、幼女姉妹への強制ワイセツで父親に捕えられ、東京・江東区の5歳の幼女を誘拐し殺害していたことと、前年夏以降埼玉西部と東京で起きていた一連の幼女行方不明事件について自供した(山本 2015:179)と述べた。犯人の自室には、裸の幼女の写真や、ワイセツビデオなどがあり、親は知らなかった(毎日新聞 1989.8.11)と毎日新聞では述べられている。犯人の犯行に影響を与えたと考えるワイセツビデオなど、子どもの教育に悪影響を与えるであろうものにも焦点が当てられ、子ども部屋にしながら犯行の目を育てられることが問題視された。

1980年代には、少年犯罪率が増加したとともに、子どもによる子ども部屋に関わる凶悪事件が増加したことが重なり、「子ども部屋批判」を支持する意見が過熱したのではないだろうか。子ども部屋で犯行が行われた、犯行の原因となったと報道されることにより、世間の人々は、子ども部屋が子どもに犯罪を犯させる危険性があると考えようになった。3-3-1の子どもの不登校・引きこもり同様に子ども部屋の、親の管理の行き届かない点が問題視されていた。

3-3-3 1980年代の子どもにまつわる社会背景のまとめ

以上が 1980 年代の子どもに関する社会問題である。不登校・引きこもりにしても、少年犯罪・凶悪事件にしても、実際に問題となったあとに、その原因として子ども部屋が挙げられていることが特徴である。

ここで、1980 年代の「子ども部屋批判」の構図をまとめる。1980 年代の「子ども部屋批判」では、不登校・引きこもりや、少年犯罪・凶悪事件の温床となるから、子ども部屋が悪いという構図になっている。言い換えると、不登校・引きこもり犯罪から子どもを遠ざけたいという子ども観から子ども部屋を批判するという構図であり、西洋、明治時代から 1970 年代までの子ども部屋観同様、子ども部屋に子ども観が関わってくるのが分かる。ここでは、2 章までの子ども部屋推進の時代とは逆向きの大人による「支配」があるのではないだろうか。2 章では、勉強「させる」という支配のために子ども部屋が必要であった。しかし、子ども部屋批判論においては、引きこもりを「させない」、犯罪を「させない」ための、子ども部屋の不要性を説いているのではないか。子ども部屋が積極的に与えられていたことにしても、「子ども部屋批判」にしても、大人による子どもへのコントロール力、支配力という根底の部分と一緒にすることが重要になる。正反対のことを言っているようで、根底は同じなのではないか。1980 年代には、子どもを犯罪から守りたい、子どもを親の目の届くところに置くことで、子どもを悪いものから遠ざけたいとする、子どもを重要視する意識は、1970 年代までと同じなのであり、子ども本位が生み出した子ども部屋観という点では共通している。

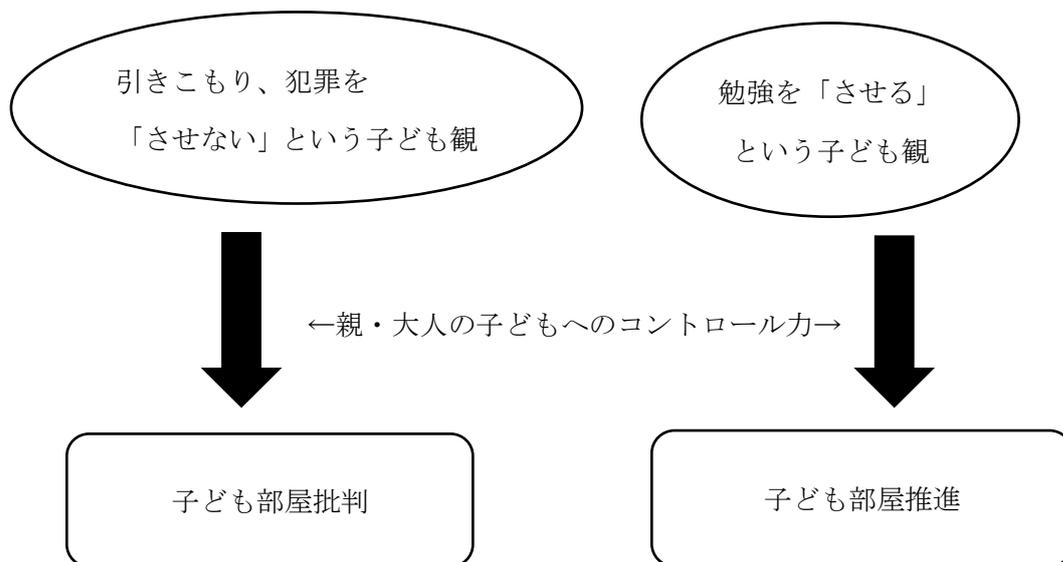


図 3-3

3-4 「子ども部屋批判・批判」

「子ども部屋批判」というセンセーショナルな意見は世間に衝撃を与え、多くの人々の意識を変えたが、それらに対する反対意見も出てくる。子ども部屋は子どもにとって悪いものではないという意見をここでは考察する。「子ども部屋批判」に対する批判をここでは「子ども部屋批判・批判」とする。「子ども部屋批判・批判」は、「子ども部屋批判」の何を批判し、どのような子ども観が背景にあったのかを、「子ども部屋批判・批判」に対する意見が多く掲載されている『現代のエスプリ』210号(1985)を中心に参照しながら分析する。そして、「子ども部屋批判」との違いを見つける。

「子ども部屋批判」に批判する人々の特徴として、子どもの問題を子ども部屋にすべて起因させるのではなく、子ども部屋を「部屋」として割り切って扱うべきであるという意見が多い。『現代のエスプリ』の「家族のコミュニケーションと住まい」において宮脇檀は、

基本的には心の満足感、人の触れ合いというものは、物が生み出してくれるものではなくて、当たり前のことですが心の状態の産物であることだと思います。今日の私たちはそうした心の問題を物にすりかえてごまかして生きていく、または不満を言いたてるというパターンをとりがちになっているのではないのでしょうか(宮脇 1985 :95)

と述べている。「子ども部屋批判」は、人が物に執着しすぎてしまったことが原因で起こった議論であるという。「子ども部屋批判」の、人と人の中で起こったはずの家族内の問題を深く掘り下げるのではなく、その原因を単なる物質である子ども部屋に求めたことを批判しているのである。

宮脇は、子ども部屋と家族内の問題の関係性について、「個室ができたからとコミュニケーションが欠けたのではなくて、もともとコミュニケーションが薄かったか、または無くなりかかっている家族の中で、個室が触れ合いの欠落を助長しただけに過ぎなかった」(同書 :98)と述べた。子ども部屋が家族のコミュニケーションを阻害する役目を担うか可能性があることは間違っていないが、それが原因ではないということが、宮脇の子ども部屋批判への反論である。子ども部屋が問題の原因の全てではなく、元々家族内に問題の原因となるものがあるという見解である。

また、個室に閉じこもることが家族のコミュニケーションを阻害するのではなく、ある一種のコミュニケーションの手段であるとする考えもある。『現代のエスプリ』の「家族のあり方と子ども部屋」において外山知徳は、「『閉じこもり』は助け〔原文ママ〕を求める合図であり、個室はその媒体にすぎない」（外山 1985 :190）と述べている。コミュニケーションの遮断ではなく、子どもからの無言のサインであるため、それを親が見て、「コミュニケーションが取れなくなった」とあきらめるのではなく、子どもに働きかける必要性があるということではないだろうか。

子ども部屋が子どもに関する問題を引き起こす原因になるという考えの因果関係が逆であるという考えもある。外山は、

「個室が子どもをダメにする」論理によると、個室が親子のコミュニケーションを奪い、それで子どもがダメになる。ところが個室にこもったために登校拒否になった例は今だに見つからないのである。登校を拒否するようになった子どもが、そうなってから個室にこもるようになった例ばかりで、逆のケースを私は見たことがない(同書 :189)

と述べている。現実には前後関係が逆であるという主張である。天野正子も、『モノと子どもの戦後史』において、

子どもたちのコミュニケーションの貧しさや「外部」の世界への無関心、少年犯罪の増加の原因を、子ども部屋や個室の存在に求めるのはあまりにも短絡的である。むしろ、その因果関係は逆だと理解した方がよいだろう。なぜなら子ども部屋をめぐる現象や事件は、子どもの社会化のエージェント(家族や学校、地域やメディア環境など)の変化とその問題性を映すものであり、子ども部屋は単にそれを表徴する記号にすぎないからだ(天野 2007 :60-61)

と述べている。「子ども部屋批判」は、子ども部屋が子どもに悪影響を与えるという文脈であり、外山や天野の述べるような逆のケースを考慮していないことが指摘できる。「子ども部屋批判」は、子ども部屋があるから登校拒否になってしまう、子ども部屋があるから犯罪を起こしてしまうと主張している。しかし、登校拒否になり、子ども部屋にこもってしまう、

犯罪を犯そうとする子どもが子ども部屋で犯罪を起こすというようにも考えられる。このように考えるとき、子ども部屋は、「原因」そのものではなく、「道具」である。

また、日本の子ども部屋が勉強部屋として作られていったことが問題であり、子ども部屋その物には問題があるわけではないという意見もある。この指摘は、日本の子ども部屋と、西洋の子ども部屋を比べていくことで明確化する。

西洋の子ども部屋と、日本の子ども部屋は、役割が異なる。日本では、家庭教育の重要性が、子ども部屋を作り出すことにつながってゆく。つまり、「家で勉強する」ための部屋として子ども部屋が作られたのである。天野が、「子ども部屋が他でもない学習机に代表される勉強部屋として始まったという事実は、日本社会に独自の現象として興味深い」（天野 2007 :48）と述べているように、勉強部屋として子ども部屋が生まれることは西洋ではない。このことは 2 章でも述べたが、ここでは、西洋と日本それぞれの子ども部屋の使い方とそれに影響する子育て観について考察する。

西洋・欧米の子育ては、子どもの自立に重きが置かれている。北浦かほるが、「世界の子ども部屋:子どもの自立と空間の役割」において個人主義文化圏では、独立心を養うこと、自己主張ができることを確立することが子育ての大きな目標である(北浦 2006 :21)と述べているように、子どもの精神的な独り立ちを促すことが重要視されている。

また、北浦は、「子ども部屋はなぜ必要か」で自立の獲得の過程で大きな役割を果たしているのが、物理的環境のコントロールの経験であり、子どもは寝室などの空間を自分の意志で制御し、自分を守ることを学ぶ(北浦 2015 :4)と述べている。子ども部屋を子育ての一環として取り入れている点が重要である。子ども部屋を与えることが、子どもの成長に役立つと考えているのである。

ここで、西洋と日本の教育・子育て観を比較する。北浦かほるの「子ども部屋はなぜ必要か」を表にしたものが下の表 3-1 である。

表 3-1 日本と西洋の子ども部屋観の違い

	日本	西洋
子ども部屋の役割	勉強部屋	寝室兼子どもの生活部屋
掃除をする人	親	西欧:手伝う親もいる アメリカ:徹底して手伝わない
いつから与えるか	零歳から与えるという発想はない	零歳からでも与える
教育	親子密着	自立

(出典)北浦(2015)を元に筆者作成

教育観の欄に注目すると、日本と西洋ではそもそも教育観が正反対である。親子が一緒であることが重要視される日本と、子どもが独り立ちすることが重要視される西洋では、親の教育方法が異なるため、親の与える子ども部屋も異なった使い方をされる。日本では、親子が一緒であることが好ましいとされるため、勉強の時だけ子ども部屋を使えばよいと考えるし、子どもの持ち物である子ども部屋の掃除にも介入する。西洋は、子どもと親が切り離されて考えられるため、子どもの生活は子ども部屋が中心となるし、自分の部屋は自分で掃除する。つまり、日本では子ども部屋は勉強だけすることが好ましいと考えられ、西洋では、すべての生活を子ども部屋で行うことが好ましいと考えられている。

一口に子ども部屋といっても、教育観が異なれば異なった使い方をされる。日本は近代化して、子ども観や家族観を西洋から取り入れたが、教育観・子育て観は日本独自のものだったため、ここに西洋との違いが生まれてしまった。『現代エスプリ』の「子ども部屋をめぐる問題」において外山知徳は、日本における子ども部屋の失敗に対して、「西洋的な個の自立に向けた子育ても学校教育も実現せず、社会の仕組みも個の自立を前提とするようには変わらなかったのにも拘らず、モノとしての個室だけ売りつけてしまったことにも起因している」(外山 1985:10)と述べている。西洋風の使い方を享受せずに、子ども部屋を受け入れてしまったことが、日本で子ども部屋が問題視されてしまった理由とされている。

また、外山によると、

子ども部屋が、建築家や教育関係者の理念とは裏腹に、受験戦争に向けてのお守り

として普及して、結果的に個の自立に向けたしつけの至らなきの免罪符の役割を担わされてしまったというところに問題があるのである(同書 :11)

という。西洋のような自立を重んじた子育てをすることのない日本で、子どもが勝手に自立していくとは考えにくい。親がそのようなしつけをしなかったことを、子ども部屋を与えたからだとして責任転嫁している点を批判している。子ども部屋を受容するにはまず、子どもを自立させるような子育てをするべきであると述べている。

「子ども部屋批判・批判」では、子ども部屋を勉強部屋として使っていたことに問題があるのであり、子ども部屋そのものに問題がある訳ではないと主張した。また、「子ども部屋批判」の、子どもに自立を促す子育てをするというしっかりとした土壌があつてから子どもの成長に機能する子ども部屋を、土壌のない状態で与えてしまったことを批判し、西洋と日本の子育て観・教育観の違いを考慮せずに子ども部屋自体を批判していた点を批判していた。「子ども部屋批判・批判」の背景には、西洋と同様に子どもの自立に向けた子育てをするべきだという子ども観があり、そのために子ども部屋を与えるべきだという子ども部屋観がある。ここから、「子ども部屋批判・批判」には、明治時代から 1970 年代までの子ども部屋を積極的に作ろうとしていた時代とも、1980 年代の「子ども部屋批判」の時代の子ども部屋が子どもに悪影響を与えると考えていた時代とも異なり、子ども観を見直し、子ども部屋を見直すという動きがみられる。つまり、親や大人の子どもへの支配・管理力を見直し、それに伴い子ども部屋の与え方も考え直すべきという構図(図 3-4)がある。親が子どもを支配・管理する目線から子ども部屋を与えていた、1 章の子ども部屋を積極的に与えていた時代と、2 章の子ども部屋を批判していた時代とは異なる新しい子ども部屋の時代に入り、現代の子ども部屋の時代の先駆けとなっているのではないか。

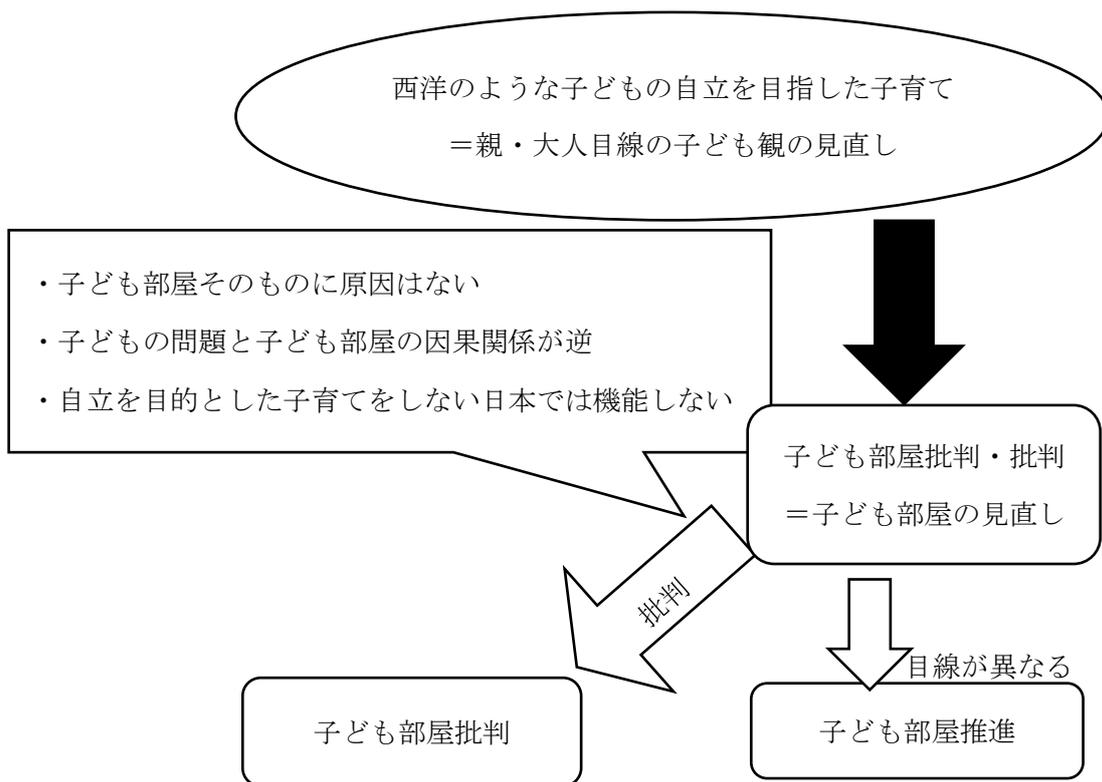


図 3-4

3-5 3章のまとめ

1970年代頃までは、子どもが勉強できる空間として普及していた子ども部屋は、1980年代に入ると、家族間のコミュニケーションを阻害する、子どもが引きこもったり、犯罪の温床になると批判されるようになった。当時の子どもに関する社会問題とともに子ども部屋が批判され、「子ども部屋批判」が広がっていった。

大人や親は、子どもを取り巻く問題から子どもを遠ざけるために子ども部屋はない方が良いと考え、子ども部屋批判は世間に広まった。ここには、子どもを「引きこもらせない」「犯罪をさせない」という大人・親側の管理力が働いている。「勉強させる」時代とは正反対ではあるが、同じように子どもを親の思う方向に向かせるための力である。

子ども部屋が批判されるようになると、反対に「子ども部屋批判」を批判する意見も現れ始める。子ども部屋は単なる物であり、子ども部屋自体に責任があるわけではないということ、問題と子ども部屋の因果関係が逆であること、本来自立を目的とした子ども部屋を日本人が勉強部屋として使ったことに問題があるということが、「子ども部屋批判・批判」であり、

背景には、子どもの自立を目指した子育てをすべきという子育て観・子ども観があった。この子育て観・子ども観は、親が子どもを支配・管理するという親目線の構図とは異なった目線の意識であると言える。子ども部屋自体に問題はないということを主張し、子ども部屋を見直す動きが強まった。「子ども部屋批判・批判」は、子ども部屋のあり方をもう一度考え直すという点で、子ども部屋を推進していた時代や、子ども部屋を批判していた時代の二極化された子ども部屋論とは異なる構図で子ども部屋が考えられており、「子ども部屋批判・批判」は現代に通じる新しい子ども部屋観のさきがけではないかと考える。「子ども部屋批判・批判」から始まる現代の子ども部屋の関係は4章で考える。

第4章 現代の子ども部屋

子ども部屋を積極的に与えていた時代、子ども部屋が子どもに悪影響を及ぼすと考えられていた時代という二極化された枠組みでの子ども部屋論争を経て、子ども部屋を見直す動きが出始めた。子ども部屋の使い方を見直す動きから、現代ではどのような子ども部屋へのまなざし、子ども部屋観が生まれてきたのだろうか。また、親が子どもを管理するという親目線を「子ども部屋批判・批判」の時に抜け出した日本では、現在、親の子どもへの意識や、子どもへの目線、子育て観はどのように変化し、どのように子ども部屋観に影響しているのかを考察する。

まず、現代の家族観・子ども観を考える。前章までも、家族観・子ども観と子ども部屋観の密接な関係があったため、現代でも同様に考える。親が子どもを管理・支配する時代ではなくなった現在の親の子どもへの目線、子ども観を考察する。

次に、各住宅メーカーの子ども部屋論を分析する。戦後台頭してきた住宅メーカーが、現在でも大きな存在感を持つ現代で、住宅メーカーが家族観・子ども観をどのように家や間取りに関連付けて考えているかを考え、現代の子ども部屋のあり方を考える。

また、現代大学生に子ども部屋のアンケート調査をとる。子ども部屋の所有実態や、意識などを問う調査は現代には見られなかったため、筆者が調査し、現代の子ども部屋を客観的に捉えるための参考にする。調査結果から、現代の子どもや親の子ども部屋への意識が2章・3章の時代とどのように変化し、現代ではどのような子ども部屋観を形成しているのか

を考察する。

4-1 現代の家族観・子ども観

4-1-1 ゆとり教育

現代の子ども観を考えるときに、大きな影響を与えたものとして、「ゆとり教育」がある。「ゆとり教育」は、『新版 子どもの教育の歴史』内の内田純一の「グローバル化のなかの生活と教育」によると、1980年代初頭の受験戦争激化、校内暴力の頻発、いじめや不登校などの社会問題を受け、中曽根康弘首相主導で臨時教育審議会が設置され、1985年から1987年にかけて4次にわたる答申を出し、教育改革を目指した(内田 2008 :277)。臨時教育審議会の基本原則「①個性重視, ②基礎・基本の重視, ③創造性・考える力・表現力の育成, ④選択の機会の拡大, ⑤教育環境の人間化, ⑥生涯学習体系への移行, ⑦国際化への対応, ⑧情報化」(同書 :277)が、のちの教育改革まで受け継がれることで、「ゆとり教育」は完成する。臨時教育審議会の答申を受けて1989年に改訂された「学習指導要領」では、

従来における知識の伝達に偏った一方的で画一的な教育から、児童生徒の主体的な学習への転換を図るため、「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力」の育成を重視する、「新しい学力観」が打ち出された(内田 2008 :278)

と内田は述べた。受験戦争激化などの時代を振り返り、従来の学力重視の教育を疑問視し、子どもが自ら考え、自ら学ぶ力を育てるという教育方法に変わった。最終的に、「ゆとり教育」は、「学校完全週5日制の実施、教育内容の厳選(3割削減)、『総合的な学習の時間』の新設」(同書 :278)の形で実施されるようになった。子どもが教育を「与えられる」受け身であった立場から、教育を自ら「受ける」能動的な立場になることが「ゆとり教育」では期待された。子どもの自発的な行動が期待され始めていることが分かる。

日本では、勉強部屋として子どもに子ども部屋が与えられたように、学力重視の風潮が何十年も続いていた。その風潮を大きく転換させることになった「ゆとり教育」は、子ども観や子ども部屋観も大きく変えていったのだと考える。「ゆとり教育」が世間に知り渡り、「自分で考える力を育む」ことを親たちが重視するようになり、子どもには勉強も大切であるが、

子ども自身の力で考え、行動する力が大切であるという子ども観に変化する。勉強だけが教育でないと親たちの考えが変化し、勉強部屋であった子ども部屋に変化が加わったものが現代の子ども部屋なのではないだろうか。

4-1-2 情報社会化

現代を生きる子どもを取り巻くものとして、情報化社会がある。子どもの生活に大きな影響を与えているとともに、子どもの教育にも取り入れられるなど、子ども観を形成するうえでも大きな役割を担っている。「近年における情報化の急激な進展によって、学校に限らず、子どもたちがパソコンやインターネットを利用する機会は増え、彼らにとって身近なものになっている」(内田 2008 :281)と内田が述べているように、家、学校共に、子どもがネット社会とかかわることが増えている。現在では、スマートフォンの普及や、SNS の浸透により、子どもたちがネット社会につながる時間はより増えていると考えられる。

子どもたちがさまざまな情報に触れることができるようになった一方で、ネット社会が子どもたちに悪影響を及ぼす危険性も出てくる。まず、犯罪にかかわる可能性がある点である。「子どもの日常生活にパソコンや携帯電話、そしてそれらを通じてのインターネットの利用が深く入り込み、身近なものになるにつれて、関連の犯罪に巻き込まれることも増えている」(同書 :282)と内田は指摘している。被害者になるだけでなく、加害者になる可能性もある。ネット社会は、親の目に触れないところで子どもが関わるができるため、親の管理がききにくいという問題点がある。

また、情報通信機器やネットの依存による現実世界での弊害という問題もある。ネット社会と教育について内田は、「情報通信機器への依存や、バーチャル・リアリティ(仮想現実)の広がりによって、人や物との直接的な結びつきが希薄になり、個別的な学習の増加によって、学級などを単位とした集団による学びが崩れる可能性もある」(同書 :282)と述べている。集団で形成されている学校でも、個人化が進み、人間関係が希薄化するという問題点がある。

「リアル」な世界よりも、「バーチャル」の世界の方に重点を置く子どもたちは、情報社会化になり新たに生まれた子どもの姿であると言える。

情報社会化は、子どもたちが簡単に情報につながるができるという「学びの効率化」として良い面がある一方、犯罪に巻き込まれる危険性や、ネット依存やコミュニケーションの不足などを引き起こす原因にもなりえる。その良い面、悪い面ともに、大人たちはネット

と子どもについて考え始めている。

情報社会化によって、子どもがどこでもネット社会につながるできるようになった。子どもが簡単にさまざまな情報にアクセスできるようになり、親の目の届かないところで、子どもが犯罪に巻き込まれたり、依存化してしまう危険性がある。1980年代に親が子どもが子ども部屋で何をしているのか分からない危険性について指摘していたが、現代では、子ども部屋に関わらず子どもがどこでもネット社会につながるようになったため、親が子どもの行動を見張ることは子ども部屋に限らず難しくなっていると考えられる。

4-1-3 現代の子ども観・家族観のまとめ

大正時代から、勉強重視であった日本は、「ゆとり教育」によって子どもの考える力や自主性を伸ばす教育方法に転換した。また、情報社会化により、子どもがさまざまな世界に触れることができるようになり、子どもの可能性が広がる一方で、ネット犯罪との関わりによる新たな危険性が生まれ、大人や親が心配するものも増えた。その結果、子ども部屋に限らず、親が子どもの行動を見張ることはより難しくなっていると言える。

これらのことから、現代は、子どもの可能性が増える時代であると考えることができる。子ども自身が好きなように考えることができ、様々な情報に触れられる時代であり、親主体の教育であった前時代と比べて、子どもの個性を伸長するという子ども観が読み取れる。ただ、大人・親は危険から子どもを守る必要があるという点では、管理力はまだ健在であり、子どもを情報社会の問題から守るために新たな管理力が必要な時代となっているのではないか。

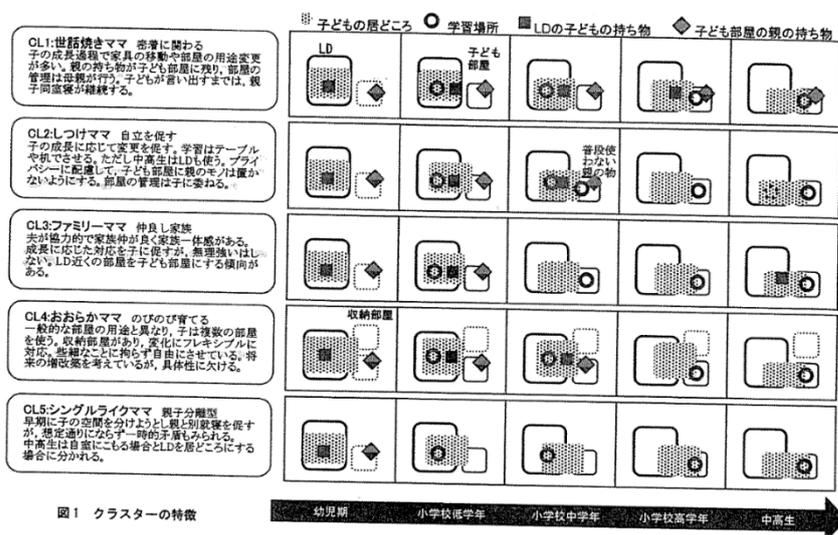
4-2 住宅メーカーの考える子ども部屋

様々な住宅メーカーの提供する子ども部屋のホームページを参照し、住宅メーカーが出版した子ども部屋についての書籍を参照する。家・間取りの語り手は、現在では住宅メーカーが主流であると考え。今では、家を作るときに住宅メーカーを通して作ることが一般的になっており、一般の人々が家について考えるときは、住宅メーカーを通じて考えることが多いからである。その住宅メーカーが一般の人向けに提供する情報は各メーカーのホームページや出版物にあると考え、様々なメーカーの子ども観や、それに伴う子ども部屋観、ど

んな子ども部屋を推奨しているかを分析し、子どもや子ども部屋への現在でのまなざしを考察する。なお、住宅メーカーは、単独売上額が1000億円を超えたメーカーの中から、子ども観と子ども部屋観についてのホームページのあった上位9社を参照し、その中で論文や文献のあったメーカーの出版物を参照する。

4-2-1 住宅メーカーの考える子ども観・教育観

「母親の育児観と子どもの居どころの関係性:住まいにおける子どもの居どころと母親の育児観に関する研究 その3」で、片山勢津子・近藤雅之・有川智子・中村孝之は、母親の育児観の子ども居どころへの影響力を考察した(片山・近藤他 2008 :113)。このアンケートには、積水ハウスが関わっている。近藤雅之は、積水ハウスハートフル研究所の人物であり、住宅メーカーが、親の育児観や子ども観を分析し、住宅作りに生かしていると考えられる。住宅メーカーはホームページで子ども部屋を紹介する際に、このような分析を利用していると考えられる。アンケート結果を、学習場所、就寝場所と母子同室寝かどうか、部屋の管理は誰がするか、インテリア行為、モノの場所という5つの観点から分析し、母親のタイプを5つのクラスターに類型化した(同書 :113.)。その結果が下の図4-1である。



(出典)片山・近藤他(2008:114)

図 4-1

この結果から読み取れることは、各クラスターともに子どもの年齢に応じて、学習場所、子どもの居どころが変化するという点であり、子どもの居場所の流動性がうかがえる。すべてのクラスターで、子どもの居場所は、リビングダイニングから、徐々に子ども部屋へと移ってゆく。幼児のころから子ども部屋が子どもの居どころとするクラスターはなく、子どもがある程度成長してから子ども部屋が子どもの居どころになっている。

また、クラスターによって差はあるが、母親は子どもの自主性を重んじた子育てを心がけていることが分かる。CL2のしつけママは、「プライバシーに配慮して、子ども部屋に親のモノは置かないようにする。部屋の管理は子に委ねる」(同書 :114)、CL3のファミリーママは「成長に応じた対応を子に促すが、無理強いはしない」(同書 :114)、CL4のおおらかママは「些細なことに拘らず自由にさせている」(同書 :114)など、子どものやりたいようにさせるという親が存在する。多くのクラスターで、子どもの自立を促す考え、子どもの自由にさせる考えが見られ、現代の母親の子ども観・育児観は先に述べたゆとり教育の教育観と同様、子の自主性を重んじる価値観に変化しているということが推測できる。また、CL5はシングルライクママであり、「親子分離型」(同書 :114)を好む母親である。親子密着の対義語である親子分離を志向する母親の出現は、親と子の距離感の変化であると考えられる。自立を促すことや、親子分離を好むことから分かるように、親が子どもを管理していた時代から、親は子どもの自主性を重んじ、管理ではなく「見守る」ようになったのではないだろうか。一方、CL1の世話焼きママは、「部屋の管理は母親が行う」(同書 :114)とあり、例外もある。CL1の世話焼きママは、子ども部屋が勉強部屋として使われていた時代と同じであり、親子密着型の考えもまだ存在している。

住宅メーカーは、アンケート調査により、子どもの自立や子どもの自由にさせるという子ども観を持っていることが分かった。ゆとり教育と通じるものがあり、この子ども観が現代の子ども観の大きな特徴であると言える。4-2-2からは、住宅メーカーが持つ子ども観をどのように家、間取り、子ども部屋に生かし、提案しているのかをいくつかの特徴を捉え分析していく。

4-2-2 子どもの成長段階によって変化する子ども部屋

住宅メーカーの子ども部屋観として特徴的なのは、子どもの成長に合わせて子ども部屋を変化させるという事であった。いくつかの住宅メーカーで、子どもの成長に特化した子ども部屋を提案していた。

ダイワハウスは、子どもの成長段階をいくつかに分け、それぞれの段階に合わせた環境つくりを提案している。ダイワハウスのコンセプトは、「成長も夢もしっかりサポート 子育てするイエのこと」(ダイワハウス 2018.12.24 閲覧)であり、子どもの成長過程を「すくすく期」「ぐんぐん期」「支えあい期」に分け、それぞれの過程に合った住まい作り(ダイワハウス 2018.12.24 閲覧)を提案している。注目すべき点は、子どもの成長に合わせ、どの時期でも子どもが快適に暮らせる家を提案している点である。

セキスイハイムは、家族の年齢に合わせて変えられる家の仕組みを提案した。可動間仕切りや可動収納壁を使って、子どもと親の寝室を作ったり、子どもが成長すれば子どもの個室を作ることができるような仕組み(セキスイハイム 2019.1.6 閲覧)を作った。子どもの成長の変化に対応するために、多様な間取りを作ることを可能にした。

ミサワホームもまた、子どもの成長段階でそれぞれの段階に必要な事をふまえ、変化させる間取りを提案している。「ホームcommons設計」という、「乳児期、幼児期、児童期、青少年期に合わせて、それぞれの“学びの空間”をデザイン」した間取り(ミサワホーム 2018.12.24 閲覧)を新提案している。この「ホームcommons設計」で注目したいのは、それぞれの時期の成長ステージ、伸ばす能力、必要なこと、重要なコミュニケーション、適する居住空間の3要素(ミサワホーム 2018.12.24 閲覧)など、建築だけではなく、子どもの発達段階など児童学の視点も盛り込んでいる点である。子どもに関する研究が進み、子どもを一方面だけでなく、多角的に捉える重要性の表れのように感じる。親が子どもに将来なっほしい理想像を強いていた時代から、子どもそのものを見つめなおす動きが読み取れる。この動きは、「子ども部屋批判・批判」の時代に子ども部屋のあり方や、子どもへの目線、子育てを見つめなおした動きの延長線であるように感じる。

パナホームは、WEBアンケートを実施し、親の子ども観を分析した上で、子どもの成長に合わせた居場所を作り、子どもを自立させる住まい作りを提案している。パナホームでは、子どもの自立を考えた子育て住まいを提案した「KodoMotto」を展開した(パナホーム 2018.12.24 閲覧)。子育て中の20~40代の親を対象にしたWEBアンケート調査の結果から、親が子どもに“元気で健康に育てほしい”と考えていること、子ども部屋が使われずに物置になっていること(パナホーム 2018.12.24 閲覧)を述べ、また、子どもを取り巻く環境が、ひきこもりや、若年無業者の増加などが問題になっていることを指摘し、子どもの自立心育成の重要性を説いた(パナホーム 2018.12.24 閲覧)。子どもに関する諸問題と子どもに必要な教育や子育てには関係性があるとパナホームは考えている。調査結果と、子どもを

取り巻く環境から、“成長に応じて子どもの居場所をつくることで、子どもの自立を促す”という「先読み設計」を、子どもの実際の行動に合わせて展開した(パナホーム 2018.12.24 閲覧)。パナホームは、WEB アンケートによって分かった、親が子どもに望むことと子どもを取り巻く諸問題を中心に子ども部屋観を形成している。その子ども部屋観は、子どもの成長に合わせて使い方が変えられるような、多様性に富んだ空間づくりである。

以上が子どもの成長に応じて変えられる子ども部屋を提案する住宅メーカーの意見である。子ども部屋が積極的に作られていた時代や、子ども部屋が批判されていた時代といった親の理想像を子どもに強いていた時代と異なり、子どもの発達段階という学術的な視点を取り入れ、子どもの成長に合わせた環境作りを提案している。親が子どもに何かを強いるのではなく、子どもの成長に親側が合わせ、環境を作るという子ども部屋観が現代にはあると言える。

4-2-3 子どもの自主性を育てる部屋

ゆとり教育は、子どもの自主性を育て、自ら行動する力を育てる教育観であり、この教育観は、4-2-1 で述べたように、住宅メーカーの考える子ども観にもあった。この子ども観を、各住宅メーカーはどのように子ども部屋に取り入れているのかを分析する。

積水ハウス総合住宅研究所は、子ども部屋は、子どもが欲しがってから与えることを提案している。そのことについて、「小さいうちはいつでもみんなと一緒に居たがりますが、徐々に自分の居どころを求めるようになり、いずれ個室を利用することになります」(積水ハウス総合住宅研究所 2018.12.24 閲覧)と述べている。それまでは、家族と一緒にリビングなどで過ごせばよい(積水ハウス総合住宅研究所 2018.12.24 閲覧)と言う。また、インテリアや壁の色は子どもに選ばせるということも提案している(積水ハウス総合住宅研究所 2018.12.24 閲覧)。積水ハウスは、子どもが発信することを重視している。親が与えるのではなく、子どもが自ら訴えかけることが重要だと考えている。積水ハウスは、子どもの自主性を重んじた子ども部屋を重要視しており、西洋の子ども部屋と通じるものがある。従来の日本の子ども部屋は、勉強するための部屋として重要視されていたが、現代の子ども部屋は、西洋のような子どもの自主性を重んじた本来の子ども部屋としての利用がされ始めていて、日本の親がそれを求め始めていると言えるのではないか。「子ども部屋批判・批判」から始まった、西洋の子どもの自立を促す子ども観が実現され始めていると言える。

ミサワホームは、子どもと家に関する本を出版している。ミサワホーム広報部は、『家は子どものためにつくるもの』で家と子どもについて、

家のなかには、子どもにとって当面の遊び場であり、親が子どもを確かに育てはしているが、ある意味で、子どもは勝手に育っていく存在でもある。だからこそ、子どもが勝手に育つ場所や空間を、われわれ住宅メーカーはきちんと整理して考え、明確な意図をもって環境をつくるのが大切だと考える。とくに現代社会では、その役割も大きくなってきているのではないだろうか(ミサワホーム広報部 2000 :220)

と述べている。ここには、子どもが「勝手に」育つこと、つまり子どもの自主性を尊重する考え方が読み取れる。住宅メーカーの役割は、子どもが育つ土壌作りであるとしている。この考えは、「子ども部屋批判・批判」の論点である、子ども部屋は単なる「物」という意見と通ずるものがある。この点に関してミサワホーム広報部は、「われわれは知性の育成を重視した家づくりを実行したからといって、子どもが必ず希望どおりに育つという『住環境万能主義』を提唱しているわけではない。子育ての中心はあくまでも親である」(同書 :219-220)と指摘し、子どもを育てるのは家ではなく、親が中心であると考えている。子どもの成長が、家または部屋に責任があると考えのではなく、親にあり、子ども部屋は子どもの成長のきっかけではないが、環境要因として影響力を与えることがあるという点を強調している。家や子ども部屋が子どもの成長において、欠かせないものであるということをミサワホーム広報部は述べている。

子どもの自主性を育てる部屋、子どもの自発性を促す部屋は、「子ども部屋批判・批判」からの流れであると言え、子ども部屋の使い方を見直した結果であると言える。子ども部屋を単なる「物」として捉えた上で、子育ての一環として子どもの自発的な力、行動を促すために子ども部屋を使うという意識は、西洋での子ども部屋の使い方と共通するものがあると考えられる。日本の教育観・子育て観・子ども観が西洋に近づき、子ども部屋の使用方法も西洋に近づいている証拠なのではないか。

4-2-4 家全体に広がる子どものための空間

子どものための空間と言えば、子ども部屋という概念が長く存在した日本であったが、現代になるとその空間は子ども部屋にとどまらず家全体に広がっている。

積水ハウス株式会社の総合住宅研究所は、「生活リテラシーbook005 子どもの生きる力を育む家」において、子どもの生きる力を伸ばす家はどんな家かを考え、どのような家が理想的か述べた。積水ハウス総合住宅研究所が定義する生きる力は、感性、身体、知性、社会性(積水ハウス株式会社総合住宅研究所 2010:11)である。そして、この生きる力と家の関係について、「感性も身体も、そして知性も社会性も、その体験を通じて育まれていきます。だから住まいの空間は、人とかがわりながら豊かな体験ができる環境でありたいと思うのです。子どもの生きる力を育むこと。それが、家の持つ大切な役割のひとつなのですから」(同書 :37)と述べている。子どもの生きる力は家の中で体験することによって伸びていくと考え、この力を伸ばす家が子どもに必要であると述べている。子どものすべてのはじまりである遊ぶことを促す遊び空間(同書 :38)、家族とのコミュニケーションで養われる学びを促す学び空間(同書 :44)、食事の用意や衣類・空間を清潔に整えるといった生活のしかたを学ぶ家ごと空間(同書 :52)、土、草生き物とふれあうことを促す庭ごと空間(同書 :60)の 4 つの空間を意識した家づくりをすることが、子どもの生きる力を育むと述べた。ここには、家にとどまらず庭までも子どものための空間にするべきとあり、子どものための空間の広がりを読み取れる。積水ハウス株式会社総合住宅研究所は、家の全ての空間を子どもの生きる力を育むための環境として用意することを提案している。

また、積水ハウス株式会社総合住宅研究所は、子ども部屋にも言及している。

子どもの居どころは家族と共に過ごす「パブリックエリア」でまず形成され、徐々に「プライベートエリア」へと移行し、青年期に入ると「プライベートエリア」が主な居どころになるのです。子どもを視点にした家づくりといえ、つい子ども部屋ばかりに意識が向かいがちですが、子どもの「生きる力」を育む家づくりでは“家族とのつながりの場としてのパブリックエリア”と“自己の拠点としてのプライベートエリア”をどうつくるかが大切だと言えます(同書 :66-67)

と述べた。「パブリックエリア」がそもそも子どもの居場所であることが重要である。「パブリックエリア」で家族と過ごす時間を経て子どもは、生きる力を身に付け、「プライベートエリア」で自分 1 人の空間を持ち、自立に向かうというのが子どもと家の関係性である。こ

こにも、子どもの空間が子ども部屋だけでなく、家族との空間にもあることの重要性が読み取れる。子どもの空間はまず、家族との共有空間にあることが前提であることを強調している。

大和ハウスの述べる子どもの空間にもまた、子どもには必ずしも子ども部屋という考え方はない。例えば、キッチンの近くにある「スタディコーナー」は、子ども部屋とは別に設けられている(ダイワハウス 2018.12.24 閲覧)。子どもが自由に過ごせる空間を重視し、家全体が子どもの過ごしやすい空間になっている。子どもの勉強する空間が、子ども部屋でないことに注目したい。親の目に触れるところで勉強することができることは、子どもが親に分からないところを質問できるというメリットが考えられるが、親もまた子どもを見守ることができるというメリットがある。情報社会化により、子どもがいつでもネット社会につながるることができる危険性については 4-1-2 で述べた。しかし、子どもが勉強を閉じられた個室でない場所で行うことによって、子どもが親の目に触れる時間が増える。情報社会を生きる子どもたちを親が見守るために、子どもに子ども部屋にこもらせない空間・家づくりが求められた結果であると考えられる。実際に、子どもの勉強する空間について、住友不動産販売がアンケートをとっている。子ども部屋を持つ家庭の 44%が子ども部屋で、50%がリビングで、3%が学校や塾の自習室と回答した(住友不動産販売 2019.1.6 閲覧)。子ども部屋で勉強する子どもが半数いる中、リビングという親の目に触れる空間で勉強する子どもが半数いることは、子ども部屋が勉強部屋という感覚は薄くなりつつあり、子どもの空間の広がりを見ることができる。

このような家全体に子どもの空間を作り、親が子を見守ることができる空間を作るという動きは他の住宅メーカーにもある。それは勉強する空間だけでなく、親子のコミュニケーションを増やす役割も担っている。三井ホームは、子ども部屋だけではなく、家自体が子どものための空間であるべきであると述べ、動線について言及している。部屋を繋ぎ、動線となるスペースで、子どもが宿題をしたり、家族のパソコンを置いたりして、家族の気配を感じさせること、階段を活用し空間の繋がりを実現させる「スキップフロア」という発想で、空間を壁で仕切らず、別のフロアにいても完全に分断されることのない空間づくりを提案している(三井ホーム 2018.12.24 閲覧)。家族を個室に分けるのではなく、家全体を一つの空間として捉えるという発想がここにはある。それによって、家族と一緒にいることを意識できるという。また、ヘーベルハウスも同様に、それぞれが別のことをしながらも家族が1つの空間に集まる間取りを提案している(ヘーベルハウス 2019.1.6 閲覧)。キッチンから母

親の目の届く場所に空間を設け、そこで子どもが勉強したり、自習や独り遊びをできる(ヘーベルハウス 2019.1.6 閲覧)間取りを提案している。親がキッチンにいて家事をする合間にも、子どもに目を向けることができる空間作りである。タマホームも、親子の距離感を縮める工夫を家全体に散りばめた間取りを提案している。例えば、階段の踊り場の壁にくぼみを作ってそこに本を並べて図書館にする、子どもの絵を飾るギャラリーにするという工夫をし、リビング以外でも親子の関係を育む空間を作る(タマホーム 2019.1.6 閲覧)という工夫である。家の一定の場所だけでなく、家全体に親と子がコミュニケーションをとれるような工夫を提案している。この三井ホームの事例やヘーベルハウスの事例、タマホームの事例もまた、ダイワハウスの事例で述べたように、子ども親の目に触れさせる時間を増やす動きが読み取れる。また、勉強の時だけでなく、子どもが家で過ごす時間を親が見守れるような家の作りを提案しており、情報社会が進んだ現在の子どもを親が見張ることができると考えられる。

これらのことから、子ども部屋だけが子どものための空間なのではなく、家族と過ごす空間が子どもにとっての居場所となってから初めて子ども部屋という個室が子どもの居場所として機能すると考えられる。家全体が子どもの生きる上で必要な力を育てたり、家族と過ごす空間であり、子ども部屋だけを子どもの空間として捉えていない。また、家全体を子どものための空間とすることで、親が子どもを見守ることができる。子どもがいつでもどこでもネット社会につながるができるようになった現在、子どもを見張る必要性が増えた。親の目の触れないところで、子どもがネット社会の危険に巻き込まれないために、子どものための空間を広げ、親の目の届くことが重要であり、そのような家作りを多数の住宅メーカーは提案している。

4-2-5 住宅メーカーの子ども部屋観のまとめ

住宅メーカーは、子どもの成長に合わせて変えられる部屋など、学術的な視点で子どもを捉えるようになり、子どもに理想像を強いていた時代との違いが読み取れる。また、子どもの自主性を尊重し、子どもが自立できることを子育ての目的とするようになり、ゆとり教育の影響力を感じられる。また、その子育て観は、西洋のものと似ており、日本の子ども観が西洋に近づいていると言え、子ども部屋観もそれに伴って変化している。また、子ども部屋だけでなく、家全体が子どものための空間であるようにすることを提案する住宅メーカー

も多くあった。そこには子ども部屋が勉強部屋と考える従来の子ども部屋観はない。この子どもの居場所の広がり、情報社会化が進み、子どもを見守ることが難しくなったことが影響すると考える。子どもがいつでもどこでもネット社会につながる可能性がある危険性から、子どもを見守るには子どもが開いた空間にいることが必要とあった結果ではないだろうか。以上のことから、住宅メーカーは、現代の子ども観を取り入れ、西洋に近づいた子ども部屋観を持っていることが分かる。子ども主体、子ども基準の子ども観・子育て観、それに伴う子ども部屋観が読み取れ、これが現代の特徴であると考えられる。

これらの住宅メーカーの述べている子ども部屋観は、理想の形であり、簡単に実行できるものではないため、これから先に家を作る人向けであると考えた。しかし、どこのメーカーも子ども目線で家を作ることを提案していたことから、現在の人々の子ども部屋観もまた、子ども目線であることが言えるのではないかと。

4-3 現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査

4-1 で、現代の子どもを取り巻く環境は、子どもの自主性を育てるという子ども観に変化したり、子どもがネット社会によっていつでもどこでも情報に触れることができ、便利な反面、犯罪に巻き込まれる危険性もあると述べた。4-2 では、それらの子ども観や子どもを取り巻く環境をふまえた子ども部屋を住宅メーカーが提案し、その結果子ども部屋は、子どもの成長に合わせて自主性を育てるものという子ども部屋観になった。また、子ども部屋だけでなく、家全体が子どものための空間で、親が子どもをいつでも見守ることができる空間を作ることが提案された。以上のことをふまえ、実際に子ども部屋を使う子ども、その親たちはどのような子ども部屋への意識を持っているのかを分析するため、アンケート調査を行った。「ゆとり教育」や情報社会に生きる現代の子どもを対象とした、子ども部屋の所有実態や意識を調査し、4-1、4-2 の子ども観、子ども部屋観と、実態を比較する。

4-3-1 調査の概要

調査の目的は、現代を生きる子どもたちは、どのくらい子ども部屋を所有し、どんな意識を持っているのかを明らかにするためである。子ども部屋の所有調査は、既存のものがいくつか存在しているが、自ら考えた現代の子ども観、子ども部屋観と比較するために独自で調査することにした。4-1、4-2 の考察から、3つの仮説を立てる。1つめは、現代の子どもた

ちにとって子ども部屋は勉強するための空間ではないという仮説である。子どもの居場所となる空間は広がっており、子ども部屋を重視する子どもは少ないと考える。2つめの仮説は、親もまた、子ども部屋を勉強するための空間として与えてはいないという仮説である。親の子どもへの目線は、子どもの自主性、自由に任せるものになっていると考える。3つめの仮説は、親は子どもが子ども部屋にこもることを嫌がる傾向にあるのではないかという仮説である。情報社会化により、子どもを取り巻く危険性が増えていることから、親の目の届かない子ども部屋に必要以上にいることを好まないのではないか。

調査の名称は、「現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査」であり、2018年11月29日に行った。対象集団は、明治学院大学の「子どもの歴史社会学」を受講している学生である。現代大学生の子ども時代のことを「現代」と考え、対象を大学生に絞った。できるだけ多くの学生の意見を対象にするため、演習の元森絵里子先生に協力いただき、授業冒頭の時間に、先生の授業を受講している学生にアンケートに答えてもらった。調査票の配布・回収方法は、調査員が対象者に調査票を配布、調査の説明をし、記入後回収する集合調査の形をとった。回収率83.5%であり、有効票は82票、無効票は4票であった。調査票と、調査結果の度数分布表は巻末に付録として掲載する。

4-3-2 調査結果

まず、子ども部屋の所有実態である。表4-1を参照する。「自分だけの子ども部屋を持っている」人と、「兄弟姉妹と一緒に部屋を持っている」人の累積は、93.9%であり、子ども部屋は現代大学生のほとんどが持っていると言える。また、その中でも「自分だけの子ども部屋を持っている」人は86.6%であり、8割以上の人が自分1人だけの部屋を持っていることが分かった。3章で参照した、1984年のベネッセ総合研究所のアンケート結果は、子ども部屋を持っているのは84.5%であり、そのうち31.3%がひとり部屋であった(深谷・塚本1984:9)ことから、1980年代よりもさらに子ども部屋の所有率は高まったと言える。子ども部屋を持っていない人は、全体の6.1%であり、少数派であった。

表 4-1 子ども部屋の有無

	度数(人)	パーセント(%)
自分だけの部屋を持っている	71	86.6
兄弟姉妹と一緒に部屋を持っている	6	7.3
持っていない	5	6.1
合計	82	100.0

また、子ども部屋を持っていると答えた人に対して、いつから子ども部屋を与えられていたか質問した。その結果が表 4-2 である。最も多かったのは、「小学生のころから」が全体の 69.5%であり、続いて「未就学のころから」の 12.2%である。ここから、子ども部屋を与えられる時期は比較的早いことが分かる。

表 4-2 いつから子ども部屋を持っているか

	度数(人)	パーセント(%)
未就学のころから	10	13.0
小学生のころから	57	74.0
中学生のころから	7	9.1
中学生以降から	3	3.9
合計	77	100.0

次に、親は子ども部屋をどのような目的で与えたと思うか質問した。表 4-3 を参照する。なお、この質問は複数回答可であった。最も応答数が多かったのは、「勉強させるため」で、子ども部屋を持っている人の 51.9%が応答している。勉強部屋として広まった子ども部屋の意識がまだ残っていることがうかがえる。「与えるのが普通」だと思っていた人が 49.4%で 2 番目に多いことから、親にとっても子ども部屋は与えることが当たり前の感覚になっていることが推測できる。西洋では子ども部屋は子どもの自立のために与えるものであり、勉強部屋として与えていた日本ではその感覚が薄かったが、現代では 28.6%という約 3 割の親が「自立」を意識しており、西洋式の子ども観・子育て観の普及がうかがえる。また、子ども部屋をいつから与えられたかという質問で、「小学生のころから」と答えた人が最も

多かったことと、子ども部屋を与えた目的で「勉強させるため」が最も多かったことから、小学生から子どもは勉強を始め、それに伴い子ども部屋が与えられたということも推測できる。

表 4-3 子ども部屋を与えた目的(複数回答)

	度数(人)	パーセント(%)
勉強させるため	40	51.9%
好きなことをする空間を作るため	30	39.0%
自立させるため	22	28.6%
与えるのが普通だと思っていたため	38	49.4%
その他	5	6.5%
わからない	6	7.8%

次に、子ども部屋を持っている人に「子ども部屋を持っていて良かったか」訊ねた。表 4-4 を参照する。「そう思う」が子ども部屋を所有している人全体に対して 75.3%、「ややそう思う」が 14.3%であり、合計で 89.6%になる。このことから、子ども部屋を持つことは子どもにとって身近なことであることが想定される。

表 4-4 子ども部屋を持っていて良かったか

	度数(人)	パーセント(%)
そう思う	58	75.3
ややそう思う	11	14.3
あまりそう思わない	4	5.2
そう思わない	1	1.3
分からない	3	3.9
合計	77	100.0

また、その理由を自由記述で書いてもらったところ、「1人・自分だけの空間・時間」を持つことができるからという言葉が多く見受けられた。「1人」「自分」「プライベート」の「時間」「空間」「スペース」というような記述をした人は、33(55%)人いた。その回答の一部が下の表 4-5 である。自由記述の全文は巻末付録にて掲載する。

表 4-5

勉強を静かな環境で行えたから。自分だけの時間をもつなかで、いろいろ考えを整理する時間をもてたから。
自分のパーソナルスペースであるため。好きなものを置いて好きなことをできる場所であるため。
自分だけの空間があることで安心感があるから。(怒られても逃げる場所がある)
自分の空間、時間をつくることができた。
家族との関係も大事だが1日の中で自分だけの時間・空間がなければ疲れてしまうため。
プライベートな時間をもてたから。
自分だけの空間がつかれるから。
ある程度成長していくと、異性の兄弟なら、なおさら、自分だけの部屋は成長過程において必要であると考え。
1人の空間ができる
他者からじゃまされないプライベートな空間が手に入るから。1人の時間が好きで、最も解放された気になるから。
やはり子どもにとっても自分のスペースを持つのは大事だから。そこで自分の好きなようにする(生きる)ことによって自立できるから
プライベートの空間を作り出せたから。
自分だけの空間ができるため。
自分の空間を作り上げることができたから。
侵害されない自分だけのスペースは大事だから。
自分だけの空間が欲しかったし、できて良かったと思うから。
自分の部屋は落ち着くし好きなことができるから。
1人の時間が作れた。
勉強に集中でき、また1人の時間も大切だと思ったから。
1人のスペースが生まれるからプライバシーが守られる
自分だけの空間は大切
自分1人の時間が持てるようになったから。
1人でいる空間があることで、親に怒られた時に1人になることができたから。自立できたから。

1人の空間も必要だから。
家族のいないところで自分の時間をもてたのが良かった。
私自身が独りの時間を大事にするタイプであるため。
プライベート空間が守られる点、自己管理能力がついた。
好きなように過ごせる。自分の時間を持てて良かった。
家の中、更にその内でプライベートな空間があるというのはかなりくつろぐことができているため。
私は基本的にリビングで生活していたが、たまには1人になりたい時間もあったため。
一人の空間があるから
自分のスペースを持つことができるからです。
家族の空間と個人の空間のメリハリがあって家族にも見せたくないプライベート空間が必要だと思ったから。

「家族との関係も大事だが1日の中で自分だけの時間・空間がなければ疲れてしまうため」「1人である空間があることで、親に怒られた時に1人になることができたから」「自分のパーソナルスペースであるため。好きなものを置いて好きなことをできる場所であるため」という意見が多く寄せられた。現代の子どもにとって子ども部屋は、1人になるための時間を持つための空間である側面が強いことが分かった。家族との共有空間で過ごすことを大切にしつつも、自分の好きなことをしたり、1人になる時間を欲している様子が分かる。これらの言葉が多くみられたことから、現代の子どもは、家族間であってもプライバシーを守る空間の必要性を感じていること、1人になる空間が自分の居場所として必要だと思っていることが分かった。1980年代の子ども部屋批判論では家族間のコミュニケーションの希薄化が問題視されていたが、子どもの立場では、1人になる空間は、子どもが家族と一緒に生きていく上では必要であることが分かる。

子ども部屋を持たない人を対象に、子ども部屋があった方が良かったかどうか訊ねた。表4-6を参照する。「そう思う」40.0%、「ややそう思う」40.0%という結果となり、子ども部屋は欲しい人が大半であった。

表 4-6 子ども部屋があった方が良かったか

	度数(人)	パーセント(%)
そう思う	2	40.0
ややそう思う	2	40.0
あまりそう思わない	1	20.0
合計	5	100.0

その理由を自由記述で伺ったところ、先ほどの子ども部屋を持っている人に聞いた、持っていて良かった理由と同様な意見が見られた。「あれば何かに集中したり、1人になりたい時に役立つのではないかと思ったから」「プライベート空間が必要」など、1人になれる空間の必要性を感じていた。

現代では、子ども部屋を持っている人も、持っていない人も、個人空間を求めていると言える。

保護者は、子ども部屋にこもることについてどう思っていたか質問した。ネット社会に説きと場所を問わず入り込める現代で、子どもが犯罪に巻き込まれる危険性という現代の問題をふまえ、親は子どもを目の届くところに置きたいという考えが強いのではないかと考えた上での質問である。表 4-7 を参照する。結果は、「どちらでもない」32.5%、「分からない」16.9%であり、子どもには親の意図が分かっていないことが分かった。この質問は親本人に聞かなければ成り立たない質問であると考えられる。しかし、「反対」派が20.8%いることから、子どもを目の届くところに置きたい親も存在していることが分かる。

表 4-7 子ども部屋にこもることに賛成か反対か

	度数(人)	パーセント(%)
賛成	21	27.3
どちらでもない	25	32.5
反対	16	20.8
分からない	13	16.9
無回答	2	2.6
合計	77	100.0

続いて、勉強、テレビを見る、ゲームをする、睡眠をとる空間はどこであるか質問した。

この質問は、子どもの居場所が子ども部屋に限らず、家全体に広がっているのではないかと
いう仮説に基づいた質問である。子ども部屋を持つ人、子ども部屋を持たない人にも回答し
てもらい、子どもの家での居場所を調査した。その結果が、表 4-8 である。

勉強は、一番多かったのが子ども部屋で 46.3%、続いて家族との共有空間が 30.5%であ
り、子どもが勉強する空間は、子ども部屋が最も多くはあるが、子ども部屋以外の空間にも
広がってきていることが分かる。子ども部屋が勉強部屋として与えられていた時代とは異
なる感覚になっているのだろうか。

次に、テレビを見る空間である。最も多かったのが、家族との共有空間の 92.7%で、子ど
も部屋は 2.4%であった。1980 年代の子ども部屋批判論では、子どもが子ども部屋にこも
り、家族とのコミュニケーションが取れなくなることが問題視されていたが、子どもは子ど
も部屋以外の空間にもいることが分かり、現代の子どもは家族と共有の空間で過ごす機会
が多いことが分かった。

次にゲームであるが、子ども部屋が 39.0%、家族との共有空間が 41.5%とほぼ同じとい
う結果になった。このことから、子どもの趣味はさまざまな場所で展開されており、固定の
場所で行うわけではないことが分かった。

次に睡眠であるが、89.0%で子ども部屋が最も多いという結果になった。アンケート調査
の最後に、「子ども部屋」というテーマで考えたことを自由記述で伺ったところ、子ども部
屋は寝るための空間であると回答した人が数人いた。「ピアノもテレビもベッドもあり、狭
いけど快適なはずなのに、私は寝るときしか部屋を使いません。」「寝ること以外、基本的
に子ども部屋にいることは禁止(今でも)」という回答が見られた。現代の子どもにとって、
勉強や趣味などはさまざまな空間で行うが、寝ることは子ども部屋でという感覚が推測で
きる。

表 4-8

勉強する場所	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	38	46.3
家族との共有空間	25	30.5
学校・図書館・公共施設	17	20.7
その他・しない	2	2.4
合計	82	100.0

テレビを見る場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	2	2.4
家族との共有空間	76	92.7
学校・図書館・公共施設	1	1.2
その他・しない	3	3.7
合計	82	100.0

ゲームをする場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	32	39.0
家族との共有空間	34	41.5
学校・図書館・公共施設	1	1.2
その他・しない	15	18.3
合計	82	100.0

睡眠をとる場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	73	89.0
家族との共有空間	5	6.1
その他・しない	4	4.9
合計	82	100.0

子ども部屋を持っていない人は、家族との共有空間で行うと答えた人が、勉強する場所 60.0%、テレビを見る場所 100.0%、ゲームをする場所 60.0%と最も多かった。表 4-9 を参照する。子ども部屋を持っていない人の居場所は、家族との共有空間にあると言える。子ども部屋を持っている人よりも、家族との共有空間で過ごす割合が多いと言える。

表 4-9

勉強する場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	0	0.0%
家族との共有空間	3	60.0%
学校・図書館・公共施設	1	20.0%
その他	1	20.0%
合計	5	100.0%

テレビを見る場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	0	0.0%
家族との共有空間	5	100.0%
学校・図書館・公共施設	0	0.0%
その他	0	0.0%
合計	5	100.0%

ゲームをする場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	0	0.0%
家族との共有空間	3	60.0%
学校・図書館・公共施設	0	0.0%
その他	2	40.0%
合計	5	100.0%

睡眠をとる場所		
	度数(人)	パーセント(%)
子ども部屋	0	0.0%
家族との共有空間	2	40.0%
学校・図書館・公共施設	0	0.0%
その他	3	60.0%
合計	5	100.0%

4-3-3 アンケート調査まとめ

子ども部屋は9割近くの人が持ち、子ども部屋は1980年代よりもさらに普及し、身近なものになっていると言える。そのような子ども部屋で過ごす子どもや与える側の親の意識について興味深い点が2つあった。

まず1つ目は子どもの居場所の広がりである。子どもは家の中で子ども部屋にだけいるのではなく、勉強、テレビや趣味であるゲームは、必ずしも子ども部屋で行うのではなく、家族との共有空間で行ったり、することによって居場所を変えているという事が分かった。この結果は、仮説通りであり、子どもの居場所が家全体にあることは、現代の大きな特徴であると言える。現代では、子ども部屋にこもるという概念は薄く、自由記述で多くの人が書いていたことから、1人になりたい時に使う部屋であるのではないか。家全体に子どもの空間が広がったことから、家族との共有空間で過ごすことも多くなり、そのうえで1人の時間の重要性を感じ、その時に子ども部屋を使うのではないかと推測する。

2つ目は、親の意識についてである。仮説とは反対に、現代でも子ども部屋を勉強部屋として与えている親が最も多いという点は興味深い。「子ども部屋批判」の時代に、勉強部屋としての子ども部屋が批判され、現代では子どもの自主性を促す子ども観になりつつあってもなお、親にとっては子ども部屋は勉強部屋なのである。ここに、日本では子ども部屋が勉強部屋として生まれ、馴染み、子ども部屋が勉強部屋であった時代に育った親の感覚が読み取れる。しかし、子ども部屋を与える目的で、15.6%の親が子どもを自立させるため、21.3%の親が子どもに好きなことをさせる空間を作るためと回答していたことから、子どもの自主性・主体性・自立を重んじる親、親目線ではなく子ども目線を持つ親も少なからず存在し、4-1、4-2で分析した西洋に近い子ども観、子ども部屋観を持つ親もいることが分かった。子どもが部屋にこもることを反対する親が多いのではないかという仮説は、本調査では検証することが難しく、十分な結果を得ることができなかったが、子どもの居場所が広がり、子どもがあまり部屋にこもることが少なくなり、親はその点をあまり意識していないのではないかと調査全体から推測する。調査全体から、子どもの居場所の広がり、情報社会化による親の不安によるものではなく、子ども自身がさまざまな場所に居場所を作っているという側面が強いと考える。

4-4 4章のまとめ

4章の構図は図4-2を参照する。4章では、まず、現代の子ども観について述べた。「ゆとり教育」により、子どもの自主性や考える力を伸ばす、子どもの自由を尊重するという子ども観が生まれた。従来の学力重視の考えから一転したことが特徴である。また、情報社会化によって、子どもが簡単にさまざまな情報にアクセスできるようになり、子どもが犯罪に巻き込まれるという新たな危険性が生まれ、親の心配するものも増えた。

次に現代の家作りと密接な関係を持つ住宅メーカーの持つ子ども観、それに伴う子ども部屋観を分析した。子どもの成長に合わせて間取りを変えること、子どもの自主性を促す子ども部屋にすること、子ども部屋に限らず家全体を子どものための空間にすることが、住宅メーカーの提案する現代に合った子ども部屋、家であった。ここには勉強するための部屋という従来の子ども部屋観がない。これらが、現代の子ども部屋の特徴であり、新しい子ども部屋観であると言える。また、現代の子ども観、子ども部屋観は、子どもを自立に導くという西洋の意識に近づいており、「子ども部屋批判・批判」で子ども部屋の使い方が見直された影響により、子ども部屋観が西洋式に変化したと考えられる。

子ども部屋を使う大学生にアンケート調査をした結果から、子どもは子ども部屋だけを使うのではなく、家の様々な場所で過ごし、1人になりたい時に子ども部屋を使うという事が推測できた。住宅メーカーの分析と同じく、子どもの居場所の広がりを読み取れる。また、子ども部屋を勉強部屋と考える親が依然としていることが分かり、住宅メーカーの分析と、一般の親の意識のずれがあることが分かった。しかし、子どもの居場所の広がりや、子どもの自主性・子どもの自由を尊重する親の存在も目立つことから、子ども観・子ども部屋観の西洋化は世間にも普及しつつあることは調査結果から言える。

勉強部屋という子ども部屋観は、現代の親の中には存在しているが、住宅を提案する側の住宅メーカーにはないことから、少しずつ衰退していると考えられる。子どもの居場所が子ども部屋だけでなく家全体に広がっていること、子どもの自由、自主性を重んじた子ども目線の家作りが現代の特徴であり、子どもの空間は子ども部屋である意識が強い。親目線で親の理想像を子どもに強いていた、子ども部屋を積極的に与えていた時代、子ども部屋を批判していた時代とは異なる。

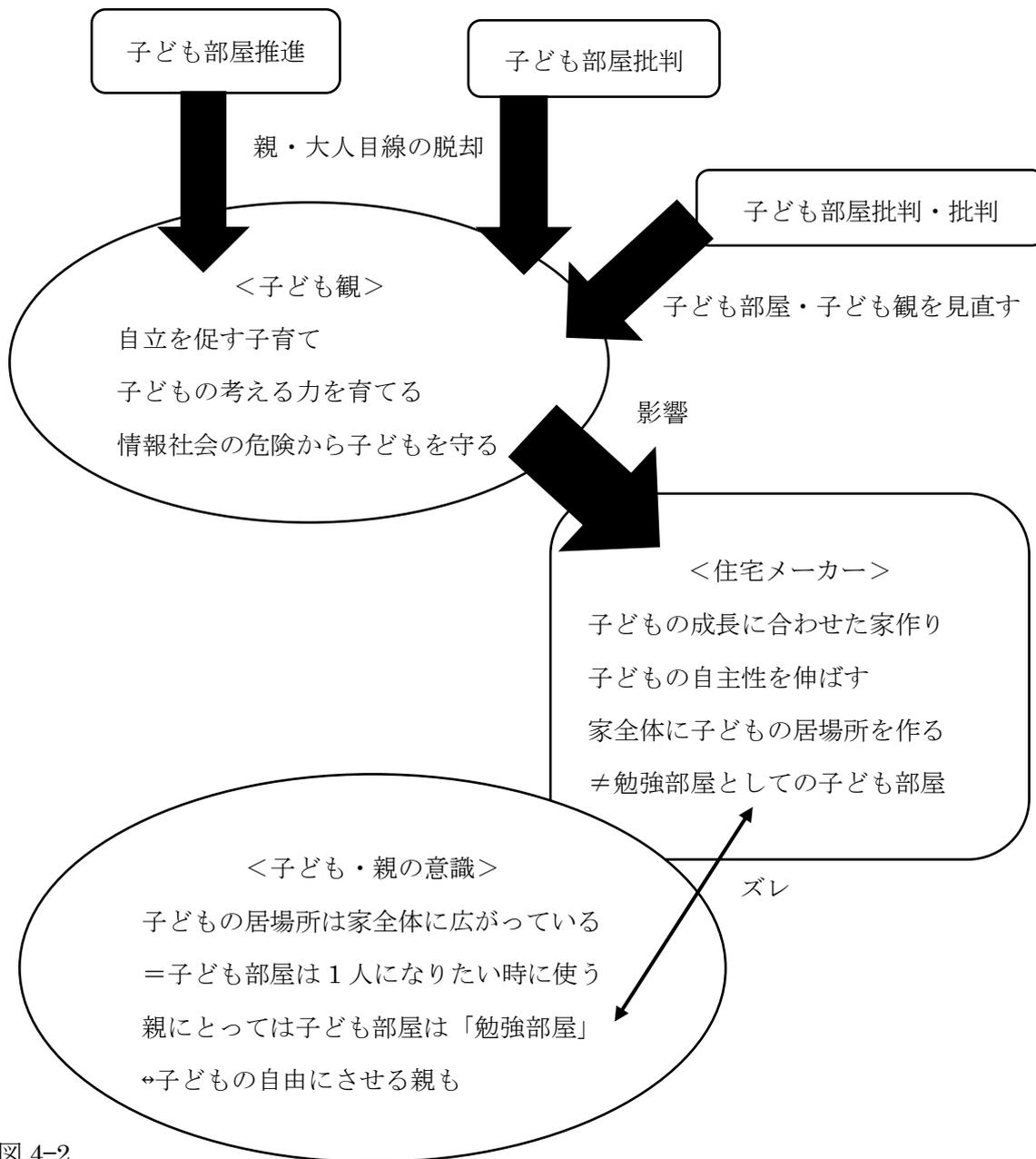


図 4-2

終章

本稿では子ども部屋を4つの時代に分けて考えてきた。1つ目の時代は、西洋で子ども部

屋が誕生した時代である。西洋で子どもが大人と異なる存在であることが発見されてから子ども部屋が生まれる時代であり、子ども部屋の起源と言える時代である。2つ目の時代は、子ども部屋が日本で知られるようになってきた明治から第二次世界大戦後の1970年代までの時代であり、子どもには勉強するための空間として子ども部屋が必要であるとされ、子ども部屋の推進と普及の時代である。3つ目の時代は、子ども部屋は家族間のコミュニケーションを阻害するとして、子ども部屋はない方が良くと批判される時代であり、それに対する反対派の意見「子ども部屋批判・批判」も生まれた。「子ども部屋批判・批判」により子ども部屋をもう一度見直す時代に突入した。4つ目の時代は、現代で子ども部屋の有無に関する議論が沈静化し、子ども部屋観が新しい時代に突入した時代である。現代で子ども部屋は必要か、または不必要かという意見が交わされなくなった原因を、その前の3つの時代の子ども部屋議論の構図を解き明かし比較することで、現代でどのような子ども部屋観があるのかを探ることが本稿の問いであった。

まず、1つ目の時代では、西洋での子どもの誕生の歴史を見ることで、子ども部屋がどのような目的でなぜ生まれたのかを考察した。まず、子どもが大人と切り離して考えられていなかった時代から、子どもが子どもとして大人と分けて考えるべきだという時代に変化した。また、公共の場であった家が、私的生活を営む場になり、家族が公共の場から切り離されるように変化した。これらの変化により、個室化という家の変化が起こり、子ども部屋が生まれる。この歴史から、子ども部屋には子ども観・家族観の変化と、家や間取りという建築的な視点に関わるという構図を発見し、子ども観・家族観と家・間取り観が子どもにどのように影響するかという構図を2章以降の子ども部屋分析の柱としていくことにした。

2つ目の時代は、日本でも個室化の動きが進み、子どもには学力が必要であるという家・間取り観と子ども観・家族観によって、勉強部屋として子ども部屋が作られる時代である。子どもに勉強させるという事は、近代家族に特有の価値観であり、それまでの家業を継ぐという伝統が衰退し、子ども自らの力で職を手にする必要性があり、そのために学力が必要とされるという時代背景があったからである。親、特に家庭での子どもの教育を担っていた母親たちが、子どもの将来のために勉強「させる」という子どもに対する管理・支配力が働いていたことがこの時代の子ども部屋の構図になる。

次に、子ども部屋の普及が進み、多くの子どもが子ども部屋を持つようになった3つ目の時代の1980年代に、引きこもり・不登校や少年犯罪など子ども部屋と絡めた諸問題が発生した。子ども部屋があることが、親の目の届かない原因であるとし、子ども部屋はない方

が良いと考えられた。この意見は、2つ目の時代の意見と同じ親の管理力が根底にある。正反対の意見のようで、子どもを引きこもらせない、子ども部屋で悪いことをさせないという親による子どもを管理、統制という構図は共通している。

「子ども部屋批判」が起こった時代には、子ども部屋を擁護する意見、つまり「子ども部屋批判・批判」の意見も生まれた。この意見は、子ども部屋は単なる物であり、子ども部屋にすべての原因があるとするのはおかしい、子どもの諸問題は、先に問題があつて、それが子ども部屋で起こっているのであり、「子ども部屋批判」は因果関係が逆であるという意見である。「子ども部屋批判・批判」は、子ども部屋を見直す意見であり、その背景には、勉強部屋として子ども部屋を与えるのではなく、子どもに自立を促す子育てをするべきという子ども観があつた。子ども部屋を勉強部屋として積極的に与えていた時代や、子どもに悪いことをさせないために子ども部屋を批判していた時代の親の管理、支配力とは異なった目線が「子ども部屋批判・批判」にはあり、新しい子ども部屋観の先駆けであると言える。

4つ目の時代である現代は、前期である3つの時代をふまえ、子ども部屋観を比較した。現代では、ゆとり教育による、子どもの主体性や考える力を伸ばすという子ども観や、情報社会化による子どもが犯罪と関わる新しい危険性が子どもを取り巻いている。この子ども観から、住宅メーカーは子どもが自立するための子ども部屋、子どもの成長に合わせた子ども部屋など、子どもを主体とした子ども部屋を中心に提案した。ここには子ども部屋＝勉強部屋という従来の子どもの部屋観がなく、それまでの時代の「大人・親目線」とは異なる「子ども目線」の子ども部屋が考えられている。また、この現代の子ども部屋観は、西洋の子ども部屋観に近づいていると言える。西洋の子どもを自立させるための空間としての子ども部屋という考えに日本もなりつつあり、アンケート結果から、勉強部屋という日本独自の使い方も世間ではいまだ健在ではあるが、西洋で生まれた子ども部屋の本来の使い方を現代になって日本が受容しつつあるのではないだろうか。子ども部屋観を考えてきたが、現代になって、子どもの居場所が家全体に広がってきている。住宅メーカーは家全体が子どものための空間であることを提案した。またアンケート結果から、家族と過ごす中で1人になりたい時に使うものだと考える大学生が多かったことが分かった。この結果は、子どもが主に家族との共有空間での生活を重んじ、子ども部屋にこもることが少なくなり、子どもの居場所の広がりを目指すと考えられる。

現代で子ども部屋は、子どもの意思や子どもの成長に合わせて与えることに重きを置き、親が勉強させるために与えるという意識は衰退しつつある。それよりも、家全体が子どもの

過ごしやすい環境にすることが重要視され、子どもの居場所は子ども部屋に加えて家全体に広がっている。子ども部屋を与える・与えないという二極化された議論は、現代で子どもの成長、自立にとって良い家とは何かを考える議論に変化した。現代では、子ども部屋以外にも子どもの居場所を与えるべきという意識に向かい、子ども部屋は子どもが 1 人になるときに必要な、子どもの自立を促す部屋であると考えられ始めている。

謝辞

本稿の完成のため、貴重なお時間を割き、アンケート調査に協力していただいた「子どもの歴史社会学」受講生の皆様、3年生の時から2年間の間、熱心なご指導をいただいた元森絵里子先生、的確な助言をいただいたゼミの皆様へ心から感謝申し上げます。

参考文献

- 天野正子, 2007, 「子ども部屋:子どもの目線がつくる空間」天野正子・石谷二郎・木村涼子編『モノと子どもの戦後史』吉川弘文館, pp42-64.
- アリエス・P, 1980, 『〈子供〉の誕生:アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』(杉山光信・杉山恵美子共訳) みすず書房.
- 内田純一, 2008, 「グローバリゼーションのなかの生活と教育」篠田弘・鈴木正幸・加藤詔士・吉川卓治編『新版 子どもの教育の歴史』名古屋大学出版会, pp270-292.
- 片山勢津子・近藤雅之・有川智子・中村孝之, 2008, 「母親の育児観と子どもの居どころの関係性:住まいにおける子どもの居どころと母親の育児観に関する研究 その3」『学術講演梗概集』2008, pp113-114.
- 北浦かほる, 2006, 「世界の子ども部屋:子どもの自立と空間の役割」『生活科学研究史』5, pp15-24.
- 北浦かほる, 2015, 「子ども部屋はなぜ必要か」『人間生活工学』16(2), pp1-6.
- 厚生労働省子ども家庭局総務課編, 1999, 『全国家庭児童調査』平成11年度版.
- 小山静子, 2002, 『子どもたちの近代:学校教育と家庭教育』吉川弘文館.
- 神野由紀, 2011, 『子どもをめぐるデザインと近代:拡大する商品世界』世界思想社.
- 積水ハウス株式会社 総合住宅研究所編, 2010, 『生活リテラシーbook005:子どもの生きる力を育む家』住まいの図書館出版局.
- 外山知徳, 1985, 「子ども部屋をめぐる問題」『現代のエスプリ』210, pp5-27.
- 外山知徳, 1985, 「家族のあり方と子ども部屋」『現代のエスプリ』210, pp188-197.
- 内閣府, 2018, 『子供・若者白書』平成30年度版.
- 西川祐子, 2000, 『近代国家と家族モデル』吉川弘文館.
- 羽仁説子, 1980, 『子ども白書・一九八〇年版』草土文化.
- 深谷和子・塚本恵美子, 1984, 「調査レポート/子ども部屋」ベネッセ総合研究所編『モノグラフ 小学生ナウ:1984年度 VOL.4-1 子ども部屋』福武書店, pp6-41.
- ミサワホーム広報部編, 2000, 『家は子どものためにつくるもの』ごま書房.
- 宮脇壇, 1985, 「家族のコミュニケーションと住まい」『現代のエスプリ』210, pp94-99.
- 文部科学省生涯学習政策局政策課調査統計企画室編, 1965-1999, 『学校基本調査』昭和40年度 - 平成11年版.
- 文部科学省生涯学習政策局政策課, 1998, 「新しい時代を拓く心を育てるために:次世代を

育てる心を失う危機』『中央教育審議会答申』1998年版.

山本健治, 2015, 『[年表] 子どもの事件 1945-2015』 柘植書房新社.

吉田佳二, 2004, 『間取り百年:生活の知恵に学ぶ』 彰国社.

渡辺武信, 1984, 「私の子ども部屋論:『子ども部屋有害論』の危険性」『建築雑誌』
99(1220),pp36.

住友不動産, 「受験する子の住環境:合格力を高める住まいの工夫」 (<https://www.stepon.co.jp/special/archives/001788.html>)2019.1.6 閲覧.

セキスイハイム, 「GLOWING:家族といっしょに成長する住まい。」 (<https://www.sekisuiheim.com/spcontent/lifestylenavi/field7/>)2019.1.6 閲覧.

積水ハウス, 「子ども部屋作り、忘れてはいけない3つのポイント」 (<https://dual.nikkei.co.jp/article/049/08/?ST=mobile>)2018.12.24 閲覧.

ダイワハウス, 「子育てしやすい住まい」 (<https://www.daiwahouse.co.jp/jutaku/lifestyle/kosodate/>) 2018.12.24 閲覧.

タマホーム, 「子どもと家の関係は深い!:子どもの可能性を広げる家」 (<http://www.tamahome.jp/info/tips/hints/011>)2019.1.6 閲覧.

パナホーム, 「子どもの自立を考えた子育て住まい提案『KodoMotto(こどもっと)』を全戸商品に新展開~パナソニックとの共同研究成果を反映」 (<https://news.panasonic.com/jp/topics/2015/44041.html>)2018.12.24 閲覧.

へーベルハウス, 「子どもがのびのびと育つ家」 (<https://www.asahi-kasei.co.jp/hebel/lineup/lifestyle/children/index.html>)2019.1.6 閲覧.

ミサワホーム, 「ホームコモンズ設計:かしこい親子の楽しい間取り」 (<https://www.misawa.co.jp/homecommons/planning/index.html>) 2018.12.24 閲覧.

三井ホーム, 「子育ての場としての『家』」 (<http://stories.mitsuihome.co.jp/108.html>) 2018.12.24 閲覧.

「厳しい規則に子供が恐怖感——登校拒否増加で教育関係者指摘」『毎日新聞』(1988.12.1).

「子ども部屋」『朝日新聞』(1978.5.8-5.13).

「子供部屋は考え物!」『毎日新聞』(1983.11.17).

「自室に少女の写真散乱ビデオもぎっしり綾子ちゃん事件の宮崎」『毎日新聞』(1989.8.11).

「中2少年、両親・祖母を殺害 試験結果をしかられバットと包丁で」『毎日新聞』(1988.7.9).

「部屋にも入れぬ無力の父 女子高生コンクリート詰め事件」『毎日新聞』(1989.4.3).

付録

現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査 調査票

※質問9の「質問11の家に住んでいる家族の人数は、あなたを入れて何人ですか。」の部分は本来なら「質問8の家に住んでいる家族の人数は、あなたを入れて何人ですか。」であるが、筆者のミスでそのまま配布してしまったため、実際に配布したものを添付する。

私は、卒業論文で「子ども部屋の現代」について考えています。先行研究を分析した結果、子ども部屋には、賛成派と反対派の意見があることが分かりました。その分析をふまえ、現代の大学生の皆様が、どのくらい子ども部屋を持っているのか、どんな考えを持っているのか参考にしたく、アンケート調査のため伺わせていただきました。お忙しいところ恐縮ですが、少しお時間をいただき、回答にご協力いただけると幸いです。

なお、回答いただいた結果は、卒業論文の中で活用させていただくので、答えられる範囲で構いません。よろしくお願ひします。

※なお、本アンケートでは、

「子ども部屋」＝「保護者と住むなかで子どもだけ(自分だけまたは兄弟姉妹と共有)の部屋」と定義します。

また、特に指定のないときは、あなたが自然に思い浮かべる時点での子ども部屋について考えてください。

●質問1 あなたの学年・性別を教えてください。

()年生 男性・女性

●質問2 あなたは上の定義における「子ども部屋」を持っていますか。

1 自分だけの部屋を持っている 2 兄弟姉妹と一緒に部屋を持っている 3 持っていない



質問3～6へ



質問7へ

質問3～6は、質問2で1、2と回答された方に伺います。

●質問3 「子ども部屋」はいつから持っていましたか。

1 未就学のころから 2 小学生のころから 3 中学生のころから 4 中学卒業以降から
5 分からない・覚えていない

●質問4 あなたの保護者は、「子ども部屋」をどのような目的で与えたと思いますか。推測で構いません。

当てはまるものすべてに○をつけてください。(複数回答可)

1 勉強させるため 2 好きなことをする空間を作るため 3 自立させるため
4 与えるのが普通だと思っていたため 5 その他()
6 分からない

●質問5 あなたは、「子ども部屋」を持っていて良かったですか。

1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない 5 分からない

★上記の質問について、そのように回答された理由を差し支えなければお聞かせください。

●質問6 あなたの保護者は、あなたが「子ども部屋」にこもることに賛成でしたか、反対でしたか。

1 賛成 2 どちらでもない 3 反対 4 分からない

裏面に続きます。

質問7は、質問2で3と回答された方に伺います。

●質問7 あなたは、「子ども部屋」はあったほうがよかったですか。

- 1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない 5 分からない

★上記の質問について、そのように回答された理由を差し支えなければお聞かせください。

ここからは、全員にお聞きします。

●質問8 家の形態は次のうちのどれに当てはまりますか。

- 1 一軒家 2 集合住宅(アパート・マンション等) 3 その他()

●質問9 質問11の家に住んでいる家族の人数は、あなたを入れて何人ですか。 ()人

●質問10 以下のことをする時間が最も多いのはどの場所ですか。

ただし、「勉強をする」については学校・塾の授業時間は除きます。

該当する記号に **1**☑ をつけてください。

- A 「子ども部屋」 B 家族との共有空間(リビングなど) C 学校・図書館・公共施設
D その他(かっこ内に具体的に書いてください しない場合もここに書いてください)

勉強	A	B	C	D ()
テレビを見る	A	B	C	D ()
ゲームをする	A	B	C	D ()
睡眠をとる	A	B	C	D ()

●質問11 「子ども部屋」というテーマで考えたことや、アンケートへの感想などありましたら、お聞かせください。(例：あなたの子ども部屋の特徴、面白い子ども部屋エピソード など)

質問は以上です。お忙しいところ、ご協力ありがとうございました。

● 「現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査」調査結果の度数分布表一覧

質問 2 あなたは上の定義における「子ども部屋」を持っていますか。

子ども部屋の有無					
		度数(人)	パーセント (%)	有効パーセント (%)	累積パーセント (%)
有効	自分だけの部屋を持っている	71	86.6	86.6	86.6
	兄弟姉妹と一緒に部屋を持っている	6	7.3	7.3	93.9
	持っていない	5	6.1	6.1	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

質問 3 「子ども部屋」はいつから持っていましたか。

いつから					
		度数(人)	パーセント (%)	有効パーセント (%)	累積パーセント (%)
有効	未就学のころから	10	12.2	13.0	13.0
	小学生のころから	57	69.5	74.0	87.0
	中学生のころから	7	8.5	9.1	96.1
	中学生以降から	3	3.7	3.9	100.0
	合計	77	93.9	100.0	
欠損値	非該当	5	6.1		
合計		82	100.0		

質問 4 あなたの保護者は、「子ども部屋」をどのような目的で与えたと思いますか。(複数回答可)

子ども部屋を与えた目的				
		応答数		ケースのパーセント
		度数(人)	パーセント (%)	
子ども部屋 を与えた目的 ^a	勉強させるため	40	28.4%	51.9%
	好きなことをする空間を作るため	30	21.3%	39.0%
	自立させるため	22	15.6%	28.6%
	与えるのが普通だと思っていたため	38	27.0%	49.4%
	その他	5	3.5%	6.5%
	わからない	6	4.3%	7.8%
合計		141	100.0%	183.1%

質問 5 あなたは子ども部屋を持っていて良かったですか。

持っていてよかったか					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	58	70.7	75.3	75.3
	ややそう思う	11	13.4	14.3	89.6
	あまりそう思わない	4	4.9	5.2	94.8
	そう思わない	1	1.2	1.3	96.1
	分からない	3	3.7	3.9	100.0
	合計	77	93.9	100.0	
欠損値	非該当	5	6.1		
合計		82	100.0		

質問 6 あなたの保護者は、あなたが「子ども部屋」にこもることに賛成でしたか、反対でしたか。

こもることに賛成か					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	賛成	21	25.6	28.0	28.0
	どちらでもない	25	30.5	33.3	61.3
	反対	16	19.5	21.3	82.7
	分からない	13	15.9	17.3	100.0
	合計	75	91.5	100.0	
欠損値	非該当	5	6.1		
	無回答	2	2.4		
	合計	7	8.5		
合計		82	100.0		

質問 7 子ども部屋を持っていないと回答した人への質問

あなたは「子ども部屋」はあった方が良かったですか。

あったほうがよかったか					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	2	2.4	40.0	40.0
	ややそう思う	2	2.4	40.0	80.0
	あまりそう思わない	1	1.2	20.0	100.0
	合計	5	6.1	100.0	
欠損値	非該当	77	93.9		
合計		82	100.0		

質問 8 家の形態は次のうちのどれに当てはまりますか。

家の形態					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	一軒家	50	61.0	61.0	61.0
	集合住宅	32	39.0	39.0	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

質問 9 質問 8 の家に住んでいる家族の人数は、あなたを入れて何人ですか。

家族の人数					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	1	1.2	1.2	1.2
	2	4	4.9	4.9	6.2
	3	8	9.8	9.9	16.0
	4	49	59.8	60.5	76.5
	5	12	14.6	14.8	91.4
	6	4	4.9	4.9	96.3
	7	2	2.4	2.5	98.8
	8	1	1.2	1.2	100.0
	合計	81	98.8	100.0	
欠損値	無回答	1	1.2		
合計		82	100.0		

質問 10 以下のことをする時間が最も多いのはどの場所ですか。

勉強					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	子ども部屋	38	46.3	46.3	46.3
	家族との共有空間	25	30.5	30.5	76.8
	学校・図書館・公共施設	17	20.7	20.7	97.6
	その他・しない	2	2.4	2.4	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

テレビ					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	子ども部屋	2	2.4	2.4	2.4
	家族との共有空間	76	92.7	92.7	95.1
	学校・図書館・公共施設	1	1.2	1.2	96.3
	その他・しない	3	3.7	3.7	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

ゲーム					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	子ども部屋	32	39.0	39.0	39.0
	家族との共有空間	34	41.5	41.5	80.5
	学校・図書館・公共施設	1	1.2	1.2	81.7
	その他・しない	15	18.3	18.3	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

睡眠					
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	子ども部屋	73	89.0	89.0	89.0
	家族との共有空間	5	6.1	6.1	95.1
	その他・しない	4	4.9	4.9	100.0
	合計	82	100.0	100.0	

● 「現代大学生の子ども部屋所有実態・意識調査」

子ども部屋を「持っている」と回答した人への質問5「あなたは子ども部屋を持っていて良かったですか」に対する自由記述

- ・「子ども部屋」という意識がそもそもない。
- ・4番は前提として間取りがあったことが考えられる
- ・勉強を静かな環境で行えたから。自分だけの時間をもつなかで、いろいろ考えを整理する時間をもてたから。
- ・子ども部屋をもっているけど、寝るためだけにしか使っていなかったし、だんだん使わなくなった。テレビがあって親のいるリビングにいたかったから。

- ・親に自分が何をしているのかと言う事を知られたくない(親というより自分以外の他人)と言う気持ちが中学生～高校生ぐらいから生まれたため。
- ・個人的に自己のプライバシーを大事にしたい性質なのでそこが保障されていて良かった。
- ・思春期に伴うはじらいや自己形成(趣味・嗜好や性格など)に関するプライバシーがある程度守れたと思うから(同居する家族からも)。
- ・自分のパーソナルスペースであるため。好きなものを置いて好きなことをできる場所であるため。
- ・自分だけの空間があることで安心感があるから。(怒られても逃げる場所がある)
- ・自分の空間、時間をつくることができた。
- ・家族との関係も大事だが1日の中で自分だけの時間・空間がなければ疲れてしまうため。
- ・プライベートな時間がもてたから。
- ・自分だけの空間がつかれるから。
- ・勉強に集中したい時など、リビングからテレビの音や家族の会話が多少聞こえていながらも、壁を隔てているため自分には直接影響しないという程よい生活音の中で作業ができるという点で、子ども部屋を持って良かったと感じる。
- ・1人になりたい。誰にも邪魔されない居場所が欲しかった。
- ・勉強等、集中できる環境があるのはよかった！
- ・ある程度成長していくと、異性の兄弟なら、なおさら、自分だけの部屋は成長過程において必要であると考える。
- ・1人の空間ができる
- ・他者からじゃまされないプライベートな空間が手に入るから。1人の時間が好きで、最も解放された気になるから。
- ・中3で自分の部屋を持ったので「子ども部屋」はいらないのではないかと強く思っている。他の家族との会話が少なくなるし、1人で部屋に閉じこもってしまう可能性もある。勉強においても誰かの目があった方が集中できると私は感じたので「子ども部屋」はいらないのではないかと思った。
- ・自分の部屋は寝るだけの場所となっており、使用してないため
- ・やはり子どもにとっても自分のスペースを持つのは大事だから。そこで自分の好きなようにする(生きる)ことによって自立できるから
- ・プライベートの空間を作り出せたから。

- ・ 自分だけの空間ができるため。
- ・ 自分の空間を作り上げることができたから。
- ・ 侵害されない 自分だけのスペースは大事だから。
- ・ 自分だけの空間が欲しかったし、できて良かったと思うから。
- ・ 自分の部屋は落ち着くし好きなことができるから。
- ・ 1人の時間が作れた。
- ・ 勉強に集中でき、また 1人の時間も大切だと思ったから。
- ・ 1人のスペースが生まれるからプライバシーが守られる
- ・ 自分だけの空間は大切
- ・ ある程度自立を促すと思うから
- ・ 自分1人の時間が持てるようになったから。
- ・ 家族と過ごす時間が好きだから。寝るためだけに使っていたから不要に感じる。
- ・ 1人でいる空間があることで、親に怒られた時に1人になることができたから。自立できたから。
- ・ 1人の空間も必要だから。
- ・ 家族のいないところで 自分の時間をもてたのが良かった。
- ・ 私は中学受験をしたので小6には勉強をしなければならず、3つ下の弟と同じ部屋では静かに勉強できなかったのが良かった。
- ・ 私自身が 独りの時間を大事にするタイプであるため。
- ・ プライベート空間が守られる点、自己管理能力がついた。
- ・ 自分のやりたいことができるから(ゲームとか)
- ・ あまり部屋で過ごさず、基本的にリビングにいるから
- ・ 1人で寝る練習になった。好きなことができた。
- ・ 好きなように過ごせる。 自分の時間を持てて良かった。
- ・ ひとりっこで父が単身赴任だったので母とリビングで談笑することが多く、あまり部屋にいたことがなかったため子ども部屋が物置きと化してしまっているため。本来の子ども部屋の使い方をしていない…あまり部屋にいない→エアコンない(とりつけていない)→夏：暑い冬：寒いから部屋に行かない→物置きと化す。勉強机もベッドも本棚もあるけど、リビングの横の客間にフトンしいて寝てるし、リビングで勉強してた…。小さい頃一人で寝れない…とかなかったけど母と寝てた。

- ・家の中、更にその内でプライベートな空間があるというのはかなりくつろぐことができているため。
- ・弟と遊べるから
- ・親との空間を分けることで遊ぶときに友達と秘密の話とかできた(小学生)勉強はリビングでしており、勉強部屋としては使えなかったのも、目的と少しちがうのかなと感じた。
- ・悩み事や考え事を一人でしたい時にあったので、とてもそういう時によかったと思う。
- ・私は基本的にリビングで生活していたが、たまには 1人になりたい時間もあったため。
- ・自分の作業効率が上がった。
- ・一人の空間があるから
- ・家族と離れて勉強するスペースがあったことでいつでも集中できたり、また友達と電話したり他の作業をするにあたってとても役に立った。
- ・自分の空間があるのは良かったが、大きくなるにつれて自分の部屋にこもる時間が増えて家族との時間が減ってしまうから。
- ・自分のスペースを持つことができるからです。
- ・親や兄弟に見られない空間にすることが出来るから。
- ・家族の空間と個人の空間のメリハリがあって家族にも見せたくないプライベート空間が必要だと思ったから。
- ・子ども部屋があったからこそ、大人に監視されずに自由なことをする時間を過ごすことができたから。
- ・内省のための物理的な空間と時間が得られた。おかげさまで自我の成長に役立ったと思う。

●子ども部屋を「持っていない」と回答した人への質問 7「子ども部屋があった方が良かったですか」に対する自由回答

- ・ある一定の年齢をすぎたらプライベートな空間を持っていていいと思うから。
- ・勉強は、学校や、塾でもできるし、寝るときは、昼間で、雑魚寝するから、そんなに必要ないと思った。
- ・必ずしもなければいけないとは思わないが、あれば何かに集中したり、1人になりたい時に役立つのではないかと思ったから。後は、整理整頓などの自立も教育できるのではない

かと思う。

- ・プライベート空間が必要
- ・家族と過ごす時間が多かったから。

●質問 11 「『子ども部屋』というテーマで考えたこと」についての自由回答

- ・子ども部屋は、友だちを呼んでそこであそんだり、一生懸命勉強したりというイメージがあって、小さい頃は憧れていた。でも、自分の場合は合っていなかった。何かさみしく感じていた。一人だとよけいな事するかもと思う。
- ・子ども部屋と言う視点はとても面白いと感じた。子ども部屋が与えられるという事が保護者から見て子供が、大人の階段にさしかかると認識される時期なのかなと感じた。
- ・私の「子ども部屋」は元々客間として設定されていた部屋を使い、私の実家を出た後は客間の要素と、父の趣味の物を置く部屋の要素が混ざっている。
- ・未就学児が大きな「子ども部屋」で大きなベッドで一人で寝るとするのは自立させられている気がするし(早く“大人”にしすぎ)、偏見だが愛に満ちていないように感じる(ただ環境を与えられているだけ、子どもがさみしそう)
- ・小学校までは「子供部屋」で寝たりしていたが、弟がいるので、中学校からは自分が和室に移り、そこが「子供部屋」となった。
- ・中学まで住んでいた家は、部屋数が少なかったのもともと子供部屋はなかった。しかし、入学前(か後)にわざわざ増築して子ども部屋を作ってくれた。
- ・子ども部屋は何故か物置にされる傾向があった。わざとゲームをするためのモニター(テレビ)を置いて、私の自尊心を試すという外道極まりないことをしてきた。
- ・夏とかだと夜、寝るときに、庭にテントを張って、子どもだけでよく寝ていた。
- ・たとえ、子ども部屋があっても、家の中にあるわけだから、本当の自立を求める際には、一人暮らししなければできないし、「子ども部屋」は自立というより、プライベートの保護的な意味があると思う。
- ・区分としては「子ども部屋」に自分の部屋は当てはまると思うが、大学生にもなって「子ども部屋」と言われるのは何か違うと思ってしまいました。自分の部屋は子ども部屋ではなく「私の部屋」という認識でした。
- ・子ども部屋が家になかったら、どうなっていたのだろうかと思うとゾッとした。
- ・子ども部屋があることによって、親に見られたくないこと(勉強していると思わせておき

ながら、実は寝ていたりゲームをしていたりなど)ができる…というかしてしまうのが特徴な気がする。

- 自分の部屋があるのは当然だと思っていたので、このアンケートで、ない人もいるんだと思った。
- 最近、自分の子ども部屋が汚くて親に怒られています。妹の部屋はきれいです。
- もともとは子ども部屋で兄と一緒に使っていたが、中学生からのお年頃になると同時に壁をつけて、完全に2つの部屋に分けた。
- 弟の部屋が分かれてはいるがドアでつながっている。
- 実家に、私の机がある部屋は一階に先ほど書いたような状態であるが、兄は2階にしっかりと自分の部屋としてあるので、家の間取りや子どもの意見(私は机だけあればよくて、兄と同じ空間を共有したくなかった)にもよって、子ども部屋があるか、ないかは左右されるのではないか。
- 寝ること以外、基本的に子ども部屋にいることは禁止(今でも)
- 妹にとられるのが嫌でお菓子を部屋にストックしていて、母親に怒られたことがあります。
- 私が1人で寝始めたきっかけはサンタさんにもらったDSを夜こっそりしたくて小学校の時、1人で寝始めました。
- 家族が多い人はひとりになりたいこととかあると思うけど、たいてい母と二人とかだったのでひとりになりたくて部屋にこもる、とかなかったです。→思春期は一人になりたくて部屋にこもるとかありそうだった。子ども部屋はパーソナルスペースというか、親とはいえ侵害していいスペースではないと思う。洗った服とか部屋に勝手に入れて置く、とかあるけど…(ドラマとかで…)
- 子ども部屋→元リビングルーム。部屋にあるもの(ex タンス、机、テレビ、本棚 etc…)
- ピアノもテレビもベッドもあり、狭いけど快適なはずなのに、私は寝るときしか部屋を使いません。親との仲の良さが関係あるのかなーと思います…
- 私の部屋は家の中で一番日当たりのいい部屋だったので、外出して家に戻ってくるとよく誰かが自分の部屋にいておどろくことがあった。そういう意味では「個人・自分だけの部屋」というよりも「開かれた空間」という要素が強かったのではないかと思います。
- 私の部屋には母と私のクローゼットがあるので、勉強しているフリをして私がまんがを読んでいる時に母に入って来られるととても焦ります。

- 子ども部屋があるのが普通であるから、ない状況が想像つかない。兄と同じ部屋だった時、カーテンで無理に仕切りを作ってた。
- 私の子ども部屋はものすごく狭く、シングルベッドと一畳くらいのスペースしかありません。その為、ただ寝るだけの空間と化しています。昔(小学生くらい)はそれが嫌で子ども部屋らしい子ども部屋を欲していました。しかし今となっては必要最低限のスペース(寝る、ゴロゴロする等)があれば、十分だなと感じています。子どものころはやはり子どもらしい子ども部屋を望んでいたんだなあと感じました。
- それが子ども部屋である必要と、ある理由と、あった結果論への評価の仕方が、どれも前提を完全には合一させないのでは、と悩みました。